■21世紀・日本
■夢づくり
■国づくり

●新都造営で時代と国を拓く!

芳村思風談
山本英夫編

序文

日本の歴史を振り返れば、「新しい時代は常に新しい風土に国の中心を移しかえていくことによって始まった」ということが解ります。

日本の古代という時代を担った風土は大和地方、現在の奈良県です。そして、平安遷都で中世には京都に国の中心が移り、やがて鎌倉から再び京都へと国の中心が移りました。

しかし、京都という風土は中世の時代に、その風土の個性を実現し尽くした所ですので、新しい時代を担って国を発展させるだけの潜在能力をもはや持っていませんでした。風土に個性と能力や可能性の限界が来るのです。そして国の秩序は乱れ、やがて戦国時代に突入し、関東平野、江戸に国の中心を持って行き、ようやく日本は近代という新しい時代の発展期に入ることができたのです。

世界史を見ましても同じことが言えます。人類の文明は、アフリカ中部の大地溝帯と言われる所から始まり、やがて北部のエジプトからメソポタミア地方に文明の中心は移行し、そして地中海、ヨーロッパ、イギリス、アメリカと世界文明の中心は移動しながら人類の歴史は形成されてきました。

歴史というものは常に風土と民族と国家と思想を移しかえながら形成されていくのです。ですから、これから我々が日本に新しい時代を切り開き、新しい発展段階をつくり出そうと思うならば、まず最初にしなければならない大事業は、日本の中心を東京からまったく新しい風土に移しかえるという大遷都を実現し、新都造営の夢に日本の未来を託していくことです。

今日の日本の不況は、資本主義経済下における景気循環論に基づいて出て来る単純な不況ではありません。いわゆる、経済不況という経済の領域に原因の求められる不況ではないということです。今日の不況は世界全体が大きな時代の大転換期を迎えているが故に生じた歴史的不況と言うべきものです。ですから、歴史的な観点から対処をすることが必要なのです。

東京は近代日本の発展を支えた都であって、もはや関東平野は国力を発展させる原理的潜在能力は尽きています。東京は近代日本を支えた都としての歴史的価値を保存しながら未来を考える段階に入っています。いつまでも再開発で大切な近代日本の遺産を破壊し続けてはなりません。

遷都は、必ずいつかやらなければならないことなのです。どこかで必ずやらなければならないという時が追い詰められるようにやってきます。

しかし、追い詰められるのを待っているのではなくて、それを自覚的に先取りして、やってしまおうというところに因果律に押されてやるのではなく、因果の流れを先取りしながら、人間が因果の力に支配されないで、因果の力を利用しながら人間的に歴史をつくるという、新しい人間的な段階に入る意味がある訳です。

風土には個性があります。そして、風土の潜在能力の限界があります。ですからその限界を超えたら、もうその場所は国力を発展させる力を持ちません。そのことをしっかりと計算して、国民を苦しい状況に追い込んでしまう前に、遷都を実践して、新しい発展段階をもたらしていくという、意識的な努力をするというところに、自覚的に生きる人間の価値が出てくるのであります。

我々は歴史を自覚的につくっていくという、そういう段階にこれから入らなければなりません。ある意味でこれまでの人類の歴史は、人類史における前史であり、これから初めて我々は、人間らしい人間としての「人間の歴史」を主体的に作っていくという歴史に入るのです。

これまでは、人間は人間でありながら、人間に目覚めていません。これまでの人類は、古代においては力に憧れ、中世においては、神仏に憧れ、近世においては理性に憧れており、人間であることを恥じていました。

ようやく我々は今、人間であることに目覚めて、人類史における人間の時代を体験するのです。そして、母なる宇宙によって人間として生んでもらったことに感謝をするのです。

母に感謝して、「お母さん、ありがとう、よくぞ人間として生んでくれました。人間でよかった」と、人間であることに感謝をし、人間であることに誇りを持ち、人間として生きていくことに喜びを見い出しながら、生きていく人生をこれから生きるのです。

ようやく人類は、人間らしい人間としての歴史をつくる出発点に今立ったのです。そのためにも、どうにもならなくなるまで、放っておいて遷都をするのではなく、自覚的に意志を持って歴史を作っていくという作業をしなければなりません。

明治維新のように、お互いに殺し合ったり、革命で歴史をつくるような、そんな野蛮な歴史はもう終りにしなければなりません。我々は、自覚的に、時代の問題を先取りしながら互いに殺し合うことなく、より素晴らしい未来をクリエイトし、自覚的に歴史をつくっていく。そういう生き方ができるようになって、初めて人間的であると言えるのです。

その意味でも、まず遷都をしなければ日本の未来は始まりません。そのことを視野に入れながら全国民が遷都の問題を、互いに議論し話し合うその環境をつくっていって、そして国民の力で、新しい日本をつくろうという夢に生きる時代を、我々はこれから導いていかなければならないと思うのです。

2003 年 7 月

芳村思風

■第１部　希望と目標を

●「日本を世界一素晴らしい国にしよう!」という目標を!

今、日本において一番大事なことは、
「日本を世界一素晴らしい国にしよう」という目標を持つことです。
そして、それを国民の総意として盛り上げていく気運をつくり出していくことです。
あまりにも目の前の経済的な景気の低迷に目を奪われていて、
もっともっと重要なことが見失われているような気がしてなりません。

また、「日本を世界一素晴らしい国にしよう」ということで
新生日本づくりに対する意欲に燃えることは、
夢を無くしている子供たちにも大きな目標を与えることにもなります。
お父さんも、お母さんも、会社の社長さんも
みんな「世界一素晴らしい国をつくろう」ということで、
そのためにできることなど
いろいろな事を話し合い始めなければならないと思うのです。

そのためにも、
国民がそれだけの見識を持って、
自分たちの見識を持って、
それに相応しい政治家を選出していくというような力を
持ち始めなければならないと思うのです。
「国民のレベルがその国の総理のレベルを決定する」と言っても過言ではない訳で、
日本に相応しい総理を出せるような国民になっていくことが急務であります。

私たち自身が自分自身のレベルを上げていき、
自分の見識を高めていって、
立派な日本民族の代表として相応しい総理を選び、
そして、「世界に向けて活動を展開してもらおう」という意気込みを
持たなければなりません。

●　みんな、もっと夢を持とう、夢を語ろう

今は、とにかく夢がありません。まずは、家庭においては、

お父さんが「オレは将来こんなことをしたいんだ。
もし、オレができなかったら、お前、代わりにやってくれよな」
というようなことを子供たちに話しをしていただけたらと思うのです。

そして、父親としての夢を語り続けていただくことが
どれだけ大事なことかということです。

お母さんなら、「自分たちの家庭はこんなふうにしたい。
だから、いっしょにがんばろうね」と言って、
小さな頃からそういう夢を子供たちに語りながら、
子育てを進めて行くという姿勢を持つことが重要です。

また、学校の先生においては、
自分の担当している教科の知識の切り売りをしているだけではなく、
今自分の教えている教科の未来にはどんな夢があるのか、
また、今自分が教えている教科には
どういう問題が将来にかけて横たわっているのかということを、
子供たちに語りかけながら、
問題を担えるような子供たちをつくっていかなければなりません。

その教科の未来にある夢を実現できるような子供をつくっていくという理想に燃えて、
教育を進めて行くことが望ましいと思うのです。
大学においても、そのような姿勢で、
教科の理想というものを学生に熱く語るような先生は
大変に少なくなってしまったようです。

あらゆる領域において、夢が無いというのが現状で、
実業界においても目先の問題ばかりに意識を奪われてしまっていて、
夢を語れなくなってしまっています。
何とか目先の問題を乗り越えなければ夢は出てこないと思ってしまっているようです。

そうではなくて、「夢を語ることによって、今の問題乗り越えていく」という姿勢が
大変少ないのです。

感性論哲学的には、夢を語ることで、
問題を乗り超えていく力が湧いてくるということになっていまして、

考え方が逆になってしまっていることは悲しいことです。
夢が無いから、今の問題を乗り越えることができないのです。
人間というのは、どんな不幸な状況にあっても、
理想や夢があれば、耐えられるものです。

けれども、困難な状態に陥ってしまった時に夢が無くなってしまったら、
その困難に押しつぶされてしまうのです。

どんな時代でも、一番大事な事は、
自分の人生にどんな夢を掲げるか、自分の将来にどんな夢を描くかということです。
それは家庭でも、会社でも、地方行政でも、国家でも同じことです。
今の日本に明確なビジョンというか、夢や理想が無いから、
この不況から脱却する糸口が見えてこないのです。

夢や理想さえあったならば、今我々が抱えている問題の中で何が一番大事なのか、
まっ先に取り組まなければならない事は何なのかということが見えてくるものです。

ところが、理想も夢も無いから、出口も糸口も見えてこないのです。
理想というのは、未来に掲げるものですから、理想というものを語るためには、
人間の思考能力の中に時間軸というものが出てこなければならないのです。
時間軸とは何かと言えば、それは歴史観のことです。

● 歴史や時流という視点

どういう歴史の流れ、どういう時流というものを自分が意識しながら、
この現実を生きるかということです。
その上で自分の人生の未来に、どういう理想、どういう夢を掲げるかということが
決まってくるのです。

そういう意味では、教育にも歴史観が無い、政治にも歴史観が無い、
お父さん・お母さんにも歴史観が無い。子供たちに語れる歴史が無いのです。
今の自分が遭遇している困難な問題だけを周りに見つけているだけで、
「苦しい、苦しい」と言っているだけで、それをどう乗り越えたらよいのかという、
乗り越える道をつくっていくための目標というものが全然見えてこないのです。

だから、苦しいばかりなのです。理想が出てきて、夢が出てくれば、

その苦しさは喜びや感動・感激に変わるものなのです。

● 問題や悩みの出てくる意味

なぜなら、問題や悩みというものは、人間を苦しめるために出てくるのではないからです。
問題や悩みは、人間を成長させるために出てくるものなのです。
問題も無い、悩みも無いというのでは人間は何も成長することはできないのです。

今自分が持っている力ではどうにもならないという問題が出てくるから、
今自分の持っている力では何ともならないけれども、
何とかしたいと思うから、そこに潜在能力が湧いてきて、
そして新しい能力を獲得して進歩発展していくことができるのです。

また、「今自分の持っている力だけでは何ともならない」
という悩みや問題にぶつかるから、
「今自分が持っている力では何ともならない、でも、何とかしなければ」ということで、
「気づき」も湧いてくるのです。

命から湧いていくるというものは、
問題とか悩みが無かったら出てくることができないのです。
そのように私たち人間の命というものができているのです。

● 問題や悩みは、その人や、その会社、その国を成長させるために出てくる

ですから、問題と悩みは、自分を成長させるために出てくるのだということを
しっかりと心に刻んでおいて下さい。

国家における問題、会社における問題や悩みも、
すべて国家や会社をよくするために出てくる訳で、
問題の無いことを望むようでは、それは人生から逃げているということになります。

● 生きるということは、問題を乗り越え続けること

生きるということは、とにかく問題を乗り越え続けることです。
会社の経営も、国家の経営も根本は、問題を乗り越え続けるということです。
経営者や国家のリーダーが問題の出てくることを嫌がっていたのでは、

お話になりません。
問題が出てこないのなら、経営などはいらないのですから。
問題が出て来るから、経営が必要になってくるのです。

● 問題や悩みは、感性が感じるもの

そもそも、問題とか悩みは感性が感じるものです。
感性の鈍い人間は、問題はあっても感じませんから、
「問題が無い」と思っているのです。
そして、大問題になってからしかそれがわからないために、
影響が大きくなってしまうという具合になるのです。

現在の日本はこれほどに不良債権が大問題になるまでほっておいたというのは、
国として、国家行政としての感性が鈍いからです。
感性の「問題を感じる力」が死んでしまっているからです。
理性だけでは、問題が出てくるまでは、
または問題として感じるまでは、わからないのです。

ですから、早期発見・早期治療ということが言われる訳です。
どうしようもなくなる前に発見するのが、問題の価値なのです。
問題を早く発見しないと、乗り越えられなくなってしまうのです。

自分の力で乗り越えようと思ったら、
命の仕組みがそうなっているのですから、
命は自然治癒力というものを持っていて、
どんな問題であっても、早期に発見すれば、
命は自分の力で病気を治せるようになっているのです。
そういったことから、自然治癒力の働く範囲外に出てしまうから、
入院したり、薬を飲んだり、手術をしたりすることになってしまうのです。
早く問題を発見すれば、自分の力で治すことができるのです。

それが、感性が鈍ってしまっていて、
理性の拡大によって、理性に支配される人間になってしまっているものですから、
問題があっても、それを感じなくなってしまっているのです。
理性というのは、固定観念を持ちますから、
固定観念を持ってしまったら、現実をそのように見てしまいますから、

問題が見えてこないのです。

本当に悪くならないと、問題が感じられないのです。
手遅れになるほどにならないと、問題を問題として感じられないのです。
問題は理性には感じることができません。
理性は、その問題に対して答を出すように働きますから。
感じる範囲で問題を感じている状況が健康な状態です。
ですから、問題を乗り越えることができるのです。

●　理性だけでは、問題に対処できない

けれども、理性で「問題だ」というところまで、
ほっておいたということは、もうほとんど病気という状況ですから、
自分の力で治すことはできないという状況です。

ですから、今の日本という国をこれに当てはめると、
国民の税金を使って銀行を救ってあげたり、
国民の税金を使って大手企業を救済するという馬鹿げたことになっているのです。
どうして国民の税金で株式会社を救わなければならないのでしょうか?
大きな会社は救っても、小さな会社は救ってくれません。
倒産するまでほっておかれるのが中小・零細企業の実態です。
いかにも、これは不公平です。
そういう病的な対応しかできないような状況になるまでほっておいたということです。

残念ながら、これはいかに日本人が、理性ばかり肥大してしまって、
理性の奴隷になってしまっているかということの証明だとも言えます。

●感性を主にした進め方が急務

早くそのことに気づいて、日本人が心の底から湧き上がってくる抑え難い欲求に基づいて
生き始めるということが急務であります。
理性に支配されるのではなく、
感性を主軸に、理性を道具として駆使して生きて行くという新しい能力を獲得し、
新しい人生スタイルをつくり出さなければいけないのです。
そうでなければ、日本の再生、蘇生、新しい日本づくりを推進していくことはできません。

人間にとって一番大事なものは、理性ではありません。
人間にとって一番大事なものは、命から湧いてくるものです。
命から湧いて来るものが無いということは死んでいるということですし、
それが少ないということは病気だということです。
命から湧いてくるものがあってこその人生です。

● 奴隷の人生、家畜の人生は、楽しいでしょうか?

「何がしたいですか?」と問われて、「いや、別に」と言っているようでは、
他人が選んだことをさせられてしまうのです。
自分がしたいことではなくて、他人が選んだことをさせられてしまうということは、
奴隷の人生と同じです。
「何か食べたいですか?」と言われて、
「別に」と言って、他人が選んだものを食べているようでは、家畜と同じです。

命から湧いてくるものに導かれて、生きるのが人間の人生です。
命から湧いてくるものがあってこそ、「私の人生」が始まるのです。
理性というのは、みんなに共通するものをつくる能力ですから、
理性でつくり出した理想というものは、本当の自分の理想ではないのです。
一般的な理想なのです。
自分の理想というものは、命から湧いてきたものです。
命から湧いてくるものしか、自分の理想、自分の夢ではないのです。

理性というのは、みんなに共通するものをつくる働きをしますから、
理性で考え始めていくと、だんだんに自分が無くなっていくのです。
自分が無くなっていくということは、自分の個性も失われて行くということです。
命から湧いてくるのが自分の証明であって、
命から湧いてくるものが無くなってしまったら、
自分の人生は無いということです。

● 理性が優先すると、個性が失われる

ですから、理性的であろうとする人間は、どうしても個性が無くなってくるのです。
面白みが無くなっていくのです。

自分の人生を生きようと思ったら、

命から湧いてくる抑え難きものを大事にしていくということです。
自分の命から、欲求・欲望・興味・関心・好奇心が湧いてきて、
問題意識が働いていろいろな気づきが起きて来る。
それに対応して理性を上手に使って行く。
それが自分の人生をつくっていく原理です。

理想というものでも、頭で考えてしまっては、これを追求しようと思った瞬間から、
理想に縛られてしまうのです。
結局、堅苦しい窮屈な、何かしら縛られた人生になってしまうのです。

しかし、それが嫌で、本当に人間としての人生を歩もうと思ったら、
命から湧いてくる理想を明確にしていかなければなりません。
そして、それを確固たるものとして掲げて生きて行くということです。

「オレはこんな人間になりたいんだ」という欲求を本当に持ったならば、
その欲求を実現することに喜びがあって、その欲求を実現する人生というものは、
自分の開放感のある、
まさに生きがいのある命の燃える人生を歩み始めることができるのです。

それを、理性で理想をとらえてしまったら、とにかく人間は縛られてしまいます。
理性で計画をつくってしまうと、その瞬間からその計画に縛られてしまって、
結局は堅苦しい窮屈な経営や仕事になってしまうのです。

● 命から湧いてくるものを原理にすることが、国が燃える原理

これから、私たちが人生に持たなければならない理想というものは、
とにかくは、命から湧いてくるものとしての理想を
いかにつくり上げていくかということです。

国民がみんなそういうようにして、自分の命から湧いてくる欲求・興味・関心、
そういうようなものを拠り所として何かしら自分の人生の未来に掲げる理想が、
みんなの理想というものになるということで、
パートナーシップの関係によって、ヨコの連関で関わり始めて、
その相乗効果として燃えてくるものが、あるべき日本の理想というものです。

国民一人一人がどういう理想を持つかによって、

国民の、日本の理想が何なのか決まる訳です。

これまでは、日本の理想というものは、
総理大臣や政治家たちが決めるものだと思っていたのですが、
それは官僚政治というものであり、国民が政治家に支配されているという構図です。

本当の理想というものは、国民がつくって、国民の総意が国の理想になるというのが、
本当に国が燃えていく原理です。
国民の希望が国の希望になっていかなければ、
本当に燃えるような国の勢いなど出てくるものではありません。
とにかく、国民の一人一人が目覚めていって、
そして自分の理想を実現してくれるような総理大臣を選んでいく。
自分たちの理想を実現してくれるような議員を選んでいくということです。

本当に国民主権というものが浸透し、国民の主体性が獲得され、
そして、本当に自分の代表と言えるような人物をつくり出していき、
送り出していくことが出来ないと、日本という国の再生はあり得ません。

国民が政治家の奴隷になっていたのでは、国力はどんどん衰えていってしまいます。
国民一人一人が燃えてこないと国力は成長しません。
いろいろな仕事があり、いろいろな仕事をしている人がいて、
みんながそれぞれの仕事に燃えれば、国を爆発的に成長させることはできるのです。

けれども、ほとんどの人が燃えていないのです。
苦しんでいる状態であって、燃えてきてはいないのです。
IT 革命も、もうしぼんでしまっています。アメリカの IT も同様です。
今や世界的同時不況が押し寄せているのです。

● どういう理想を持つべきか「もしも、私が総理なら・・・」

これから、私たちはどういう理想を持たなければならないのでしょうか?
「どういう理想を持って生きたらよいか」ということを真剣に知るためには、
とにかくは歴史観にそれを求めることです。
それに立脚した上で、
「もし、私に国を任されたら、私はこの国の発展のために、何をするだろうか?」
という考え方を持つということです。

経済人、経営トップであったならば、
「もし、オレが・・・大臣になったならば、
この国の困難を乗り越えていくために、何をしなければならないのか?」
ということを考えなければなりません。
そういうことを考えないと経営者は成長しません。
「この経営が苦しいという状況を何とかしてもらえないか?」
というような依存的な依頼心を持っていたのではダメです。

国民一人一人が、自分が総理大臣になったような気持ちで、
「もし、自分にこの日本という国を任されたら、
　国を発展させるために、自分は何をするだろうか?」
ということを思わないと、本当の理想というものは出てきません。

「オレならどうするか?」「私ならどうするか?」ということを、考えるということです。
それが、国民が総理を選び、国民が議員を選ぶ能力をつくる方法です。
「オレならこうする」「私ならこうする」
ということを政治家としての職業を持った人が自分の言うことと同じなら、
その人を選ぶという仕方で選挙をしていくようにしなければなりません。

●　未来に掲げる理想・目標のために

　日本及び私たち日本人の使命を明らかにするとともに大遷都構想を提案
何度も言いますが、「何が一番今の日本に大事なのか?」。
基本は「未来に掲げる理想」です。

どういう理想を持ったら、今の、この離婚の激増とか、
あるいは不良債権の問題とか、教育問題、いじめの問題など、
我々が現実に直面しているあらゆる問題は
どういう理想を持ったら解決されるのかということを考えていかなければなりません。

その具体的なテーマの中で最大のものこそ「新都造営」であり、
「日本大遷都」であります。
そのためにも、まず私たちが生きているこの時代が
どんな時代なのかを改めてみていきたいと思います。
どんな時代に生き、どのように生き、

どのように為していかなければならないのかを明らかにしながら、
「新都造営・遷都」というテーマを浮き彫りにしていきます。

■第2部　時代認識

●現代という時代の歴史的認識

◆　世界文明の中心移動

「私たちはいかなる時代に生まれあわせ、生きているのか?」、
それについて明らかにしていきます。

大きな歴史の流れから見ると、世界文明の中心は常に動いています。
世界文明はアフリカに始まりました。
それがメソポタミア地方、地中海と動いて、
ヨーロッパからイギリス、アメリカへと移動してきました。
そして今、ようやく世界文明の中心は東アジアへと移動してきています。

世界文明の中心はやがて東アジアの中心である日本から中国へ、
さらにインドへと動いていくでしょう。
この動きは必然的であり、不可逆的なのであり、逆転は絶対にあり得ません。

これからは、日本に始まって中国、インドが
ものすごい文明的な発展を遂げるということです。
何百年、何千年かかるかわかりませんが、世界文明の中心はこのように動き続け、
その中で東洋の時代が形成されていくことになります。

つまり今、長い歴史の流れの中で、世界文明の中心は日本の真上にあるのです。
1975 年、アメリカはベトナム戦争に敗退しました。
この時期がアメリカが世界文明の中心だった極点で、
そこから次第に衰退に向かっていきました。
詳細に事実を見れば、アメリカの国力そのものは下降線の中にあり、
それが今世界に君臨しているかのごとき現象は、
全体としての衰退過程の中での揺り戻し、切り返し、下り段階での通過点にすぎません。
やがてはアメリカもイギリスのように老大国になっていく流れの中にあるのです。

そのアメリカに代わってこれからの時代を担っていくのが東アジアであり、
その中心は日本なのです。東アジアの発展なしには世界の発展はあり得ません。

◆　日本の苦境の意味

しかし、世界文明の中心を日本が担っている実感は、
まだ政治家にも国民にもありません。
これから我々日本人が使命感に燃え、
世界のために貢献していく時代をつくっていくことによって、
日本の真上に世界文明の中心があって
世界を支えているのだということを実感していくことになるでしょう。
現在はその過渡期です。

新しい時代を迎えるためには苦境をくぐり抜けなければなりません。
その苦境は
１つの民族に新しい時代を担うにふさわしい力を呼び覚まさんがためのものです。
いま日本が逢着している不況の意義は、まさにそこにあるのです。

「この苦境は日本民族の持つ潜在能力を呼び起こすためのものなのだ」、
と理解しなければなりません。
一般的に言って、苦境はすべて、人間の潜在能力を引き出すためのものなのです。

この認識をしっかりと持つこと。
これがこれから 21 世紀に向かって日本人がどのような生き方をし、
どのような仕事をしていかなければならないかの基本になります。

その上で、時代の変化について
数百年単位における変化、数千年単位における変化、数万年単位における変化、
という３つの変化についてみていきます。
この３つの変化が同時に押し寄せてきているのが今の時代です。
我々は、まさに、歴史的大転換の時代に生まれ、生きているのです。
この時代感覚をぜひ理解していただきたいと思います。

●　近代から脱近代へ・数百年単位の変化

「明治維新以来の転換」と一般的には認識されている数百年単位の変化は、
近代から次の新しい時代への転換ととらえることができます。すなわち、脱近代です。
今起こっているさまざまな事件や現象は脱近代の方向性を持っている、
と考えなければならないということです。

感性論哲学の歴史観に立てば、数百年単位の変化として５項目挙げられます。
政治においては、政党政治から脱政党政治へ変わっていく。
経済においては、資本主義から脱資本主義へ変わっていく。
社会においては、民主主義から脱民主主義へ変わっていく。
文化においては、理性文化から脱理性文化、感性文化へ変わっていく。
文明においては、物質文明から脱物質文明、精神文明へ変わっていく。

この５項目の変化、100 年単位の変化について以下述べていきます。

◆　１)政党政治から脱政党政治へ

近代の政治は政党政治でした。
ですから、いま政治の世界で起こっているすべての出来事は、
政党政治という近代的価値観が崩壊していく現象の中で起こっていることです。
これからの政治は脱政党政治の方向性で変わっていく。
これは間違いのないところですが、
さらには政党のない政治形態に向かっていくのです。

こういう政治の脱近代化を成し遂げていくためには、
選挙制度の改革、諸法律の改正など、やらなければならないことが沢山あります。
たとえば、本稿のテーマでもある遷都もその一つです。
日本の歴史を見ると、新しい時代が始まる時は、必ず新しい土地に遷都しています。
遷都することなしには日本の新しい未来を切り開いていく力が湧いてきません。
それが日本の歴史だと言えます。

◆　２)資本主義経済から脱資本主義経済へ

近代の経済は資本主義経済です。
ですから、脱近代の方向は脱資本主義経済ということになります。
資本主義という名称からして、その経済活動の目的は明らかです。
資本を増やしていくことです。
ですから、資本主義経済の下で人間が労働すれば、
否応なく「人間は金のために働いている」という意識に引きずり込まれざるを得ません。
資本主義経済の下では、どうしても人間は金の奴隷にならざるを得ません。
そういう状態から、どうすれば脱却できるか。
これが今日の最も大きな課題になっています。

人間学的経済学では、経済は人間のためにあるのであって、
人間が経済のためにあるのではありません。
この原点に帰って経済を根本から考え直す。そこに経済の脱近代の方向があります。

「経済は人間のためにある」という視点に立って経済を根本から考え直し、
新しい原理に則って利益を追求する。
金を儲けることとは違った目的を経済に設定し、
結果としてお金が儲かるという状態に経済が変わっていかなければなりません。

だからと言って、金は要らないということではありません。
経済は金を儲けるための営みですし、
物質的に豊かになることは非常に大事な人間の目標でもあります。

◆　３)民主主義社会から脱民主主義社会へ

近代社会は民主主義によって成り立っています。
ですから、時代全体が脱近代の方向性に向かっているとするならば、
社会も脱民主主義へ変わっていくのだ、という意識で社会に対さなければなりません。
つまり、
民主主義よりももっと素晴らしい社会を求めていかなければならない状態にあるのだ、
ということです。
しかし、一般的にはどうでしょうか。
民主主義社会が最高の社会の在り方である、と考えている人が多いと思います。
果たして民主主義の実体はそのようなものでしょうか?
自分たちが互いに権利を主張し合うことによって、
互いに納得できる契約として法律や社会秩序を考えていこうという訳です。
これが民主主義社会の出発点です。

民主主義社会はみんなが権利を主張し合う社会です。
権利を主張しない者は損をする構造にできている社会なのです。
違った言い方をすると、
権利を主張しなければ損をさせられるのが民主主義社会なのです。
権利を主張しないと損をする社会、
みんなが権利を主張し合う社会が民主主義社会ですから、
その本質は互いに攻め合う構造になっています。

すべてが攻め合うことで機能するようになっている、
逆に言うと、攻め合わなければ機能しない、そういう社会が民主主義社会なのです。
攻め合って妥協点を見い出すのが、民主主義社会の制度なのです。

攻め合う構造を持った社会から、
許し合って生きていく気持ちを根底にして法律を作り、
社会秩序を作っていく方向性を目指さなければなりません。
それが脱民主主義社会です。

◆　４)理性文化から脱理性文化へ

近代の文化は理性文化です。
ですから、時代が脱近代化の方向に向かっているとするならば、
文化は脱理性文化の方向性で変わっていくのだ、ということが言えます。
理性文化とは理性を原理とした文化です。
だから、社会を合理化し、自然を合理化し、人間をも合理化していったのが、
近代の歴史でした。

今日、合理的なことは正しいことで、良いことだと多くの人が思っています。
しかし残念ながら、ものごとの本質は合理的なものではありません。
そもそも人間そのものが合理的にはできていません。
ですから、理性文化はすべてを合理的な方向に歪めてしまったと、
言ってもいい状況になってしまっているのです。

人間が求めている愛も、幸福も、自由も、生きがいも、すべて理性に属していません。
つまり、考えるものではないのです。
考えるものではなく、感じるものなのです。理屈を超えたものなのです。

長い間、理性によって支配された人間は、
人間の中に眠っている非合理的な力、非合理的な能力に目覚めました。
非理性的な力、非合理的な能力とは、感性にほかなりません。
つまり、今日の状況は人間が感性に目覚めていく過程にある訳です。

そこから必然的に、
我々がこれから作っていく近代から脱近代への時代がどういうものかが
見えてきます。

近代の理性文化から脱近代の感性文化に変わっていく、ということです。

歴史的に古くから東洋の文化は感性文化でした。
でから、東洋の時代になれば、感性の実感を根拠にしてものごとを考えていく、
そういう形の文化が出てこざるを得ません。
東洋の時代になれば感性の時代になる。これは歴史的にも文化的にも必然です。

◆　５)物質文明から脱物質文明へ

近代は物質文明です。
近代の末期である今日、「人類は確かに物質的には素晴らしい豊さを獲得したが、
人間性そのものは全然進歩していない」と言われる状況にあります。
だから、これからの時代は「人間性そのものは進歩していない」ということに
どう応えるか、それがわれわれが作っていく時代である、ということになります。
それは必然的に精神文明の時代である、ということになります。
物質的豊かさに匹敵する精神的豊かさをどうつくっていくか、
それがこれからの課題です。

・古い思想を超える
物質文明の近代から脱物質文明を目指す方向性での変化が起こっています。
これからは精神文明をつくっていかなければならないということです。
しかし、これからつくっていく精神文明は過去に戻ることであってはなりません。
仏教や老荘思想、儒教、キリスト教といった精神文明を
復活させるということであっては、進歩前進になりません。
仏教もキリスト教も儒教も老荘思想も、二千年以上も前に作られたものです。
そこに戻り、古いものを復活させるのではなく、
その土壌の上に仏教よりもキリスト教よりも儒教よりも老荘思想よりも、
もっと素晴らしい思想、考え方をつくっていく。
そういうことでなければ、近代に代わる新しい時代の精神文明はあり得ません。

・肉体を持つ人間と物欲
これは残念なことなのですが、儒教も老荘思想も仏教もキリスト教も、
物質的な豊かさに対して否定的な考え方が原理になっていて、
物欲を否定する考え方が共通項になっています。
だから、これらの思想に浸っている人は、
「物欲を捨てろ」「足るを知れ」と説きます。

「足るを知」ってしまっては、文明は発達しません。
歴史を作っていくためには、物欲を否定する思想は破棄しなければなりません。
古い思想を乗り越えていく手がかりは、ここにあります。

物欲を原理的に考えてみましょう。どうして人間が物欲を持つのか?
それは肉体があるからです。肉体が物欲の根源です。
仏教やキリスト教の仏様や神様はどうでしょう?
肉体がありません。だから、「物欲を捨てろ」と言える訳です。

しかし、人間には肉体があります。
肉体がある限り、人間は物欲から離れられません。
また、肉体は人間が自ら獲得したものではなくて、
大宇宙、大自然の力によって与えられたものです。
だから、肉体の属性である物欲を否定することは、
大宇宙大自然に対する反逆であり謀反であるということになります。
「物欲を捨てろ」という思想は、残念ながら大宇宙大自然の摂理に矛盾している、
と言わなければなりません。

人間が本当に人間らしい人間として生きていこうとするなら、
つまり肉体を持った人間として生きていこうとするなら、
物欲を捨てるような思想を持ってはなりません。
と言って、物欲を手放しで肯定していいということではありません。
大切なのは、人間が物欲を持っていることの意味をしっかりと知ることです。
それは、物欲を人間的なるものたらしめなければならないということです。
物欲を人間的に洗練された品格のあるものにしていこうとすることによって、
人類は成長し、発展するのです。

●千年単位の変化

◆　1)理性原理から感性原理へ

「理性」という言葉ができることによって、
人類は理性を意識し、それを意識的に使うようになりました。
そして、理性能力を進歩させていきました。
人類は紀元前 1000 年くらいからずっと、
理性を人間の本質であると考えて、今日まできたわけです。

しかし、20 世紀を境に、理性を人間の本質と考えるのは間違いである、
という考え方に変わってきました。

その変化で一番重要なのは、フロイトによる深層心理学の創造です。
人間が生きていくことによって、
ストレスが溜まる、ノイローゼになる、ヒステリーになる、
その他さまざまな精神内科的病気が出てくる、これはなぜなのだ、と考え、
人間の本質は理性ではないということがはっきりしてきたのです。

理性で生きようとすることによって、人間性が破壊される。
人間性が破壊されるのは、
理性によって感性が抑圧され、人間性が歪められていくからです。
本当に人間らしい生き方をするには、命から理屈抜きに湧いてくる欲求とか欲望とか、
あるいは興味、関心、好奇心を大事にしなければならない。
そういうことがわかってきた訳です。
命から理屈抜きに湧いてくるものは、大自然、大宇宙の力の現れです。
ですから、大宇宙の摂理を否定しては、
人間は健康に生きていけないし、成功もできないし、幸福にもなれません。
健康になり、成功して、幸福に生きるためには、
大宇宙の摂理に添った生き方をしなければなりません。
命から理屈抜きに湧いてくるものは、大宇宙の摂理の顕現です。
だから、それを大事にして生きなければならない。そういう考え方に変わってきました。

・理性を手段能力として使う
自分の生命から理屈抜きに湧いてくる欲求や欲望は、
いかなる理由があっても、否定的な対応をしてはなりません。
そうでなければ、大宇宙の摂理に反することになり、
健康と成功と幸福を獲得する生き方ができないのです。

理性は人間の本質ではない。感性こそ人間の本質です。
感性の実感を大事にして理性を手段能力として使っていく。
このように考え方が変わってきて、
理性原理から感性原理へ転換していくことになったのが、今の状況である訳です。

◆　２)地域文明から世界文明へ

・地域分明が統合されていく
今日、ユダヤの文明とアラブの文明、
さらにヨーロッパの文明が相容れない関係で対立していますが、
そういう状態から 20 世紀を境にして、どんどん統合されていきました。
地域文明から世界文明へ、大きな転換が 20 世紀を境になされ始めたのです。
世界文明を作っていく方向性が動き始めたということです。
ここに数 1000 年単位の変化が現れています。
世界は対立から統合へと大きな価値転換を始めたのです。
対立の構造を持っていては、これからは前進はありません。
これからは統合の精神が大事なのだ、ということです。

・勝つ能力よりも統合する能力
人間にはいろいろな対立がありますが、
これからは対立して勝つことを目的にする生き方ではなく、
対立をどのように統合し、対立している双方が協力していく生き方にどう導いていくか。
それが最も重要になります。
対立の状況で、対立して勝つ能力を持っている人間よりも、
勝つ能力にすぐれた人間ではなく、統合する能力にすぐれた人間を、
今日の人類、今日の社会、今日の地球は求めているのです。
大事なのは勝つことはではない。統合することなのだ。
統合とは協力です。共生です。
協力し、共に生きていくことに力を発揮できる人間が、望まれているのです。

◆　３)二元論的人間観から一元論的人間観へ

・「理性の自分と本能の自分」と「自分は一人」
人間観の転換も起こっています。
二元論的人間観から一元論的人間観へ、という転換がそれで、
数 1000 年に１回という変化の３番目に当たるものです。
二元論的人間観とは、自分の中に「理性としての私」と「本能としての私」がある、
という人間認識のことです。
自分の中に理性と本能と、２人の私がいるのだという認識で、
今日まで人間は自分を理解し、他の人間を理解しようとしてきたわけです。
だが、実態はそうではありません。

私は私、俺は俺、１人の自分しかいないという認識が一元論的人間観です。

●万年単位の変化

◆　１)地球時代から宇宙時代へ

人類は何万年、何十万年も、地球から宇宙を見る視点しか持っていませんでした。
しかし、20 世紀を境に飛行機が発達して空から地球を見ることができるようになり、
さらにスペースシャトルが発達して、
宇宙から地球を見ることができるようになりました。
宇宙から地球を見ることができるのは、宇宙飛行士だけではありません。
われわれ一般人も通信衛星や気象衛星によって、
お茶の間にいながら宇宙から地球を見る実感を持つことができるようになりました。

地球から宇宙を見る視点しか持っていなかった人類が、
20 世紀を境に宇宙から地球を見る視点を持ち得たということは、
想像を絶する大きな価値観の転換を人類にもたらした、と考えなければなりません。
宇宙から地球を見ることによって、
人類は初めて「地球は１つ」と言えるようになったのです。

◆　２)タテ型社会からヨコ型社会へ(リーダーシップからパートナーシップへ)

今日の社会、あるいはこれからの社会を考えると、
「支配」という概念を意識の中に持っている人間は、過去の人間なのだ、
と言わなければなりません。

「支配」は悪なのです。「支配」という言葉は将来、死語になるでしょう。
現在、人間が人間を支配するという縦社会から横社会への転換のうねりが、
すべての領域において進行しつつあります。
ですから、これからの社会の在り方、あるいは組織の在り方は、
支配的な構造を持っていてはダメだということです。
これからの組織にはリーダーシップが大切なのではなく、
パートナーシップ、あるいはフレンドシップ、フェローシップの精神を
根幹にした在り方を考えていかなければなりません。

会社という組織について言うならば、

「一緒に仕事をしていく仲間なのだ」という仲間意識をどうつくっていくかが、
横社会のポイントになります。それが、団結力を作っていく原理になるのです。

◆　３)競争から創造へ(弱肉強食から適者生存へ)

・生命の原理は適者生存

20 世紀までは、弱肉強食がすべてのものを発展させる原理であって、競争が大事なのだ、
と考えられてきました。
しかし今日、この考え方は変わりつつあります。
その端的な現れは生物学の原理の変化に見ることができます。

生物学では、今日までの進化は、弱肉強食と適者生存の２つの原理があって、
適者生存よりも弱肉強食のほうがもっぱら力を発揮している、と考えられてきました。
だが、最近の生物学はガラッと変って、
生命の進化の原則として弱肉強食は存在しない、というようになってきています。
まだ教科書に載るまでにはなっていませんが、
生物学の最先端では、弱肉強食の原理で生命は進化してきたのではない、
というのが定説になってきているのです。

生物学において、生態系の研究が本格的に取り組まれるようになったのは、
20 世紀からと言っていいでしょう。
その研究の進展の中で、地球上に存在するすべての生命は、
弱肉強食、強いものが弱いものをやっつけるという原理で存在しているのではなく、
互いに支え合い、助け合うような、「共生」の関係で存在しているのだ、
ということが明らかになってきたのです。

適者生存とは、
環境の変化に自分の生命を適応させていくか、
すなわち自己革新、自己変身、自己創造を成し遂げ、
それができたものが生存し得るということです。
他と競争するのではなく、自分自身が変化に対してどう変わり、適応していくか、
自分自身を変革していく力が生存の原理なのだ、ということです。

・勝つことより成長が大事

これからの会社にとって大切なことは、
環境の変化に対応して、どう自分を変身させるかです。

環境に適合するように、自分をどう革命し、自分をどう変革し、
自分をどう変身させていくか、です。
そして、新しい自分の在り方を創造していくのです。

何万年も弱肉強食の原理で生命は進化してきたと考えられてきましたが、
20 世紀を境にして、弱肉強食から適者生存へと、
自然の摂理の価値観がまったく変わってしまいました。
このことははっきり認識しておかなくてはなりません。

この価値観の変化に基づけば、われわれの生き方も転換を迫られるのは当然です。
われわれにとって競争は大切なものではないということです。
競争に勝つことではなく、自分を成長発展させ、進化させることが大事なのです。
歳をとった者も若い者も、健常者も障害者も、能力のある者もない者も、
みんなが力を合わせてどのように、
より良い社会を作っていくかを考えなければならないのです。
それは価値観と原理の変化からきているのです。
「弱い者をやっつければいい」と言っていられる状況では、
今日の社会はありません。
能力のある者もない者も、健常者も障害者も、年寄りも若者も、
みんな互いに力を合わせて生きていくことを考えなければなりません。
その状況が人間の意識を成長させ、共生の意識が育ってきています。

・自己変身、自己創造、自己変革
会社の場合を見ても、勝っているように見える会社があります。
しかし、それは競争で勝っているのではないのです。
自己変身、自己創造、自己改革を内部で徹底的に進めた会社が、勝っているのです。
だから、勝っているというべきではありません。
成長を遂げているのです。
自己変身、自己創造、自己変革ができない会社がどんどんつぶれていき、
衰退していき、利益が出なくなっているのです。それが実態です。

■第３部　日本の使命

●　日本の使命・過渡期を担う民族の２つの仕事

第１部では、希望や目標が今の日本にとっていかに大事か
ということを述べさせてもらいました。
そして、第２部では、その希望や目標が命の底から湧き上がってくるために
どうすればいいかというところから、
まずは今という時代を正しく理解していただくということで、
激変・大転換の時代について述べさせてもらいました。
さらに、第３部では、そのような時代の中で
今の日本に、日本人として生まれたことの意味について、
日本の使命、日本人の使命という視点から述べさせてもらいます。

◆　すべては量から質への２段階で成長する

量から質へ。
成長し完成していくプロセスの発展過程はすべてに共通するものです。
文明もまた同じで、メソポタミア地方に展開された古代文明は、量的拡大の段階です。
その量的拡大が飽和状態になって質的向上に転換していく。
その古代文明の質的向上の段階で現れたのが、ギリシァ・ローマ時代だった訳です。

◆　古い時代を終わらせ、新しい時代の原理を作る

ギリシャ人が作った建築や芸術作品は、
「古い文明の原理では、もうこれ以上のものはつくれないだろう」
と言われるところまで完成度を高めていきました。
質的向上が極点まで達したのです。
「これ以上のものはつくれない」という極点に到達すると、もう先はありません。
そこにおいてそれは終わり、次の次元に進んでいくことになります。

過渡期の時代には古い文明を質において完成させ、
終わらせる仕事をまずしなければなりません。
それだけではありません。
過渡期を担う民族がしなければならないもう１つの仕事があります。

新しい文明をつくり出すための原理を創造して、世界に発信していく仕事です。
この２つの仕事を同時にしなければなりません。

ギリシャ人はどんな原理をつくり、新しい時代に向かって発信したでしょうか。
それは、「真理は１つだ。本当のものは１つしかない」という原理です。
そういう考え方に基づいて新しい歴史をつくっていこうと発信したわけです。
ギリシャ人がつくった学問は、すべてこの原理に基づいた表現でした。

ですから、中世の時代は「真理は１つだ」という原理に貫かれることになります。
この原理に従えば、宗教は多神教ではなく一神教にならざるを得ません。

このように過渡期を担う民族がしなければならない仕事は２つあります。
１つは古い文明を質において完成させ、終わらせる仕事。
もう１つは新しい時代に向けて時代の原理を作り、発信する仕事です。
この２つの仕事をやらなければ、新しい時代は始められません。

●日本の使命・日本人がなすべき仕事

◆　科学技術文明を終わらせる

さて、現在は人類史上３回目の過渡期に当たります。
そして、世界文明の中心は、今日本の真上にあります。
この３回目の過渡期を担うのは、我々日本民族なのです。
この３回目の過渡期において、
我々は日本民族はどういう仕事をしなければならないのか。

近代文明は科学技術文明です。
だから、われわれ日本民族は科学技術文明を質において完成させ、
終わらせる仕事をしなければならない、ということになります。

◆　急務は環境問題に対する回答を出すこと

では、この仕事の内容はどのようなものでしょうか。
今日まで、近代科学技術は量的拡大の中で、
地球上にさまざまな弊害をばらまいてきました。
自然破壊や環境破壊、公害などです。

その弊害をどう償っていくか。
この仕事を、科学の質を完成させていくプロセスの中でやっていかなければなりません。
それが仕事の１つです。

環境破壊という近代科学技術の罪を償うにはどうすればいいのか。
環境を破壊しない技術、環境を守る技術、環境を補修する技術、
そしてさらに廃棄物ゼロの技術を開発していかなければなりません。
すべての産業を有機的に関連させる産業の有機的連関システムを構築していくことです。

すなわち、ある産業から廃棄された物が別の産業の原料になり、
その産業からの廃棄物がさらに別の産業の原料になるという具合に、
資源を 100%有効に使える循環システムをもって全産業を組織化していく。
そういう産業構造をこれから日本人はつくっていかなければならない、ということです。

この動きはもうすでに始まっています。
全産業はいろいろな分野で環境に対する対応を考え始めています。
環境に対して補修する能力や方法、技術が向上発展しています。
環境を破壊しない技術、環境を守る技術、環境を作る技術、廃棄物ゼロの技術が
徐々に発展しています。
さらに全産業のリサイクルの完成に向かわなければなりません。
環境問題に対する回答は、ぜひ日本が出しておかなければなりません。
もし、現在の延長線上で近未来を考えれば、
環境問題に回答を出すことが日本の責務であることが明らかになります。

もし、現在のままだったら、
次に中国の 12 億とも 15 億とも言われる大きな民族が活動を始め、
地球はたちまちにして住むに耐えない環境になることは明らかです。

◆ 核廃棄物に対する回答は日本民族の使命

科学技術が犯した罪は、環境問題のほかにもう１つあります。
原子力の問題です。
人類は原子核破壊により莫大なエネルギーを獲得する技術を開発しましたが、
核廃棄物の処理については、まだ全く回答を出していません。
放射能への不安を一掃することなしには、
核科学は完成されたとは言えない段階にあります。

放射能を心配ないものにする。放射能に対する不安を一掃する。
これなしには、現代の科学は完成されたものとは言えません。
それこそ、まさに日本がしなければならない仕事です。
世界の中で核を最も保有しているアメリカでさえ、
日本に核廃棄物を有効資源化する仕事を頼んでいます。
現段階で、核廃棄物の有効利用技術は日本が一番進んでいるのです。
核廃棄物処理技術の最先端に日本はいます。
日本が放射能への不安を一掃する技術を完成し、
全人類に貢献していかなければなりません。
これも過渡期を担う日本の重要な役割です。

環境問題と核廃棄物に対する回答を出すことによって、
これ以上素晴らしいものはつくれないというところまで持っていく。
それが日本の仕事であり、日本人がそれを成し遂げることによって、
次の時代、脱近代の時代を実現していくことができるのです。

日本人がやらなければならないことが、もう１つあります。
それは新しい時代を呼び起こすための原理を世界に向かって発信することです。

政党政治から脱政党政治、政党政治でないまったく新しい政治形態を日本がつくって、
次の時代に渡していかなければなりません。
資本主義ではない、脱資本主義経済の確立もそうです。
それは「道の思想」を原理にした経済システムということになりましょう。
言葉にすれば「人格経済主義経済」です。
民主主義ではない、脱民主主義、まったく新しい社会の在り方を確立することも大切です。
物質文明から脱物質文明へ、まったく新しい精神文明を作らなければなりません。
日本人は過渡期を担う民族です。これらの原理をしっかり確立して中国人に渡していく。

その原理に基づいて次の新しい時代を作るのは中国人です。
そして、新しい時代はインドにおいて完成されます。
それが歴史の必然というものであり、大宇宙、大自然の摂理ということになります。

このプロセスの中で、われわれ日本人は過渡期を担う民族の使命を自覚し、
これからの仕事をやっていかなければなりません。
過渡期を担う民族としての自覚をいかにわれわれ日本人が深めるかに
日本の運命はかかっているのだ、と考えなければなりません。

■第4部　遷都論

●　そして、本テーマである遷都へ。なぜ、遷都なのか

基本的には、日本人は科学技術文明の質において、
完成させて終らせるという仕事と、
新しい時代を作り出すための原理を創造して発信するという仕事を
しなければなりません。
両方とも非常にクリエイティブな、不可能を可能にするような
そういう仕事の内容になってくる訳です。

それを念頭に我々が、実践しようと思ったならば、
どういうことを具体的に考えていかなければならないのかという視点から、
「日本に新しい都を造る(遷都)」について考えていきたいと思います。

日本の首都をまったく新しい環境、風土の中に造りかえる、造り直すという仕事無しには、
日本人のと潜在能力と、古いものにとらわれない新しい価値観は出てきません。

なぜ、遷都というものを実行しなければ、
日本人の使命というものを果たし得ないのかという、
その根拠と理由というものをお話しさせていただきたいと思います。

●　この不況の本当の意味

これから遷都の必要性というものを考えていくのですけれども、
今不況と言われるような状況に日本の経済は追い込まれています。
この不況はバブルの崩壊から始まった不況が、
これを現在の政府や、あるいはいろんな識者の方々は、
今日の不況を従来と同じ経済型不況といった認識で
この不況に対応しようとしてます。
実際問題 1992 年の株価崩落以来毎年毎年政府も日銀もいろいろな方策を講じながら
なんとかバブルの崩壊から経済を復活させようという努力を
必死になってやってきました。

そして結果として、毎年毎年何十兆円という莫大な金を市場に放出しながら、

景気の落ち込みを支え、かつ景気を浮揚させようという努力してきたのです。
その間、日本における名だたる世界的な経済学者の方々が、政府に様々な進言をし、
また、その進言を取り上げながら、政府は対策を練ってきました。

けれども、誰が何をしようとも、日本の景気は、
今日までまったく景気の回復の兆しを見せませんでした。
ちょっとは景気が浮揚するようなことがあっても、
すぐに息が切れてしまって、また元の木阿弥になってしまう。
そして毎年毎年放出何兆円という国民の税金は、
景気の下支えはできるけれども、浮揚力はないという状況で終ってしまっていました。

今、冷静にこの現実を見てみれば、
かえってどんな対策を練れば練るほど、ますます蟻地獄のような状況に陥ってしまって、
浮揚するどころか、却って状況は悪化しているのです。

実際問題 1992 年の株価暴落という大底値というものは、
14000 円程度というものでしたけれど、
2000 年までに 14000 円を割り、12000 円台になり、10000 円台になる。
やがて 10000 円を割り、8000 円前後を推移しています。
歴史上これは、経済環境で言うならば、
今底割れの不安を感じるような状況になってきています。
このことを見るにつけて、我々が考えなければならないことは、
「果たして今の不況は、本当に経済不況なのか?」ということです。

もし経済不況であったならば、経済学的な対策をしたならば、
それなりの効果を持って景気は浮揚したはずです。
本当ならば、何十兆円という金を市場に無尽蔵にばらまくような、
こういうことをするならば、たちまちにして大インフレになってしまうはずなのが、
資本主義経済のこれまでの常道だったのです。

けれども、インフレになるところの話じゃない。
いくら金を出してもますますデフレが進んでいってしまうという状況で、
景気はびくともしない。
その原因はどこにあるのかと言いましたら、
株価の暴落から出てくる不良債権の額と、地価の暴落によって発生した不良債権が、
重く景気にのしかかって浮揚する力を押さえているところにあります。

● 原理的歴史的不況であり、単なる経済不況ではない

しかし、不良債権のいかんに関わらず、
改めて我々は、「今の不況は経済不況か?」とまず確認しなければなりません。
今の時代は、あらゆる分野において、
原理的な変革が求められているという歴史的な大転換という時代であるということです。
経済だけが不況なのではない。
政治も不況であれば、教育も不況であれば、社会も不況であれば、
あらゆるものが、みんな原理的な変革を求められて壁にぶつかっている。
混沌たる状況になってしまっている。
そういうことが時代背景にあるんだということです。

そういう観点からするならば、
今の不況というものは、経済不況という考え方をしてはなりません。
今のこの不況は、歴史が歴史的な大転換期を迎えているが故に
発生している不況であるということを、まず頭に入れなければ、
今日の不況から日本は脱却できません。

残念ながら政府にはその認識がありません。
確固たる歴史観というものを持って、
現在の経済に対応しようというそういう視点が政府や経済界には欠けているのです。
そして現在の不況を経済不況と考えて、
経済学的なそういう方法論、手法を用いて、この不況に対応しようとしている。
そこに今日の経済対策が全く功を成さないという原因があると思うのです。

今日の不況は、経済学的な領域を越えたところから生じてくる不況だという、
その認識を持たなければ、今日の景気の状況に対応することはできません。
そういうことで今日の景気の不況は経済不況ではない。

● 歴史という視点から今日の不況をみる

それは現在を、不況を、経済不況と考えずに、
歴史的な大変換期がもたらしたそのところから出てくる原因による不況なのだ
と理解するとするならば、
我々は、どういうふうにして歴史は形成されていくものなのかとまず考え、
その次を考えていかなければなりません。

今の歴史な大変動、大変換期というものが、
どういうふうにして出てきたのかということをまず考えなければなりません。
歴史を振り返るならば、何がわかるかと言いましたら、
歴史というものは、その時代の文明のその歴史というものは、
常にその時代の文明の中心を担う風土と民族と国家と思想というものを移し替えながら、
歴史は形成されるのだということを、我々は知る必要があります。

これを具体的に言えば、どういうことかというならば、
世界史を振り返って言うならば、
人類の文明は、あのアフリカの大地溝帯という周辺から始まりました。

やがて文明は北部に移動して、エジプトに行く。
そして次には、エジプトからメソポタミア地方に行く。
そしてメソポタミア地方から地中海に文明の中心は移動してきました。
その時代の中心を担う民族が変わり、国家が変わり、
また思想が変わっていくというふうな形で歴史は、形成されてきたのです。

● 風土の個性と遷都

同様に日本の歴史を振り返ることで、何がわかるかと言うならば、
日本の歴史もやはり新しい土地に都を変えることによって、
新しい時代が始まったということを我々は認識する必要があるのです。
日本の古代は、今の奈良県、大和地方であります。

やがて京都に平安遷都をして、そこに日本の都を置きました。
そしてそこに、中世という日本が形成された。
やがて京都から鎌倉へ政治の中心、日本の中心が移動したのです。
次の時代には鎌倉から足利氏が再び京都へ都を持っていってしまった。

ところが風土というものには個性があって、
風土にもその風土が持っている潜在能力がありますので、
風土はその風土が持っている潜在能力を出し尽くしてしまえば、
風土はもう国家を発展させる潜在能力を持ち得ないようになってしまう。

そして、京都という風土は、この中世における平安時代において、

その風土の持つ個性の特徴を出し尽してしまった風土です。
それ故に、この足利氏が２回目に京都に室町時代に都を持っていった時代の時には、
もうすでに京都という風土は、
中世の時代、平安時代にその能力を出し尽してしまったから、
もう２度と国家をさらに発展させるということを表現し得なかったのです。

ですから、足利氏が京都に都を持っていったら、
たちまちにして全国は混乱し始めて、乱れに乱れ、
やがて戦国時代に突入して全国が麻のごとく乱れて、国家の自治は崩壊しました。

その戦国時代を通して、ようやく京都を通して、
今度は江戸を政治の中心、日本の文明の中心を持っていくということになり、
初めて日本は秩序を回復して、そして安定的な積極発展の時代に入る訳であります。

とにかく日本の歴史を考えても、世界の歴史を考えても、
時代というものは、新しい風土に都を移さなければ、新しい時代は始まらないという、
歴史的事実をまずしっかりと我々は確認する必要があります。

● 風土を変えて、時代を変える

風土は変わらなければ、時代は変わらない。
風土を変えなければ、同じ時代は、同じ思想が、同じ価値観が保守的に働いている。
そういう状況になるのです。
時代を、風土を変えることによって、
考え方とか、あるいは価値観とか思想とか変わっていって、
そして新しい時代というものをまったく質の違った新しい時代を
作っていくというそういう歴史が形成されるのです。

いかに歴史において、風土という考え方は、
重要な問題だということを考えなければなりません。
これを哲学的に表現するならば、
時間というものを空間において表現すれば、空間の移動ということになってきます。
場所を移動するということが空間的に時間を表現する方法なのです。
時間というものを現実化したものが歴史なのです。

● 歴史は、空間の移動で綴られる

ですから歴史というものは、空間の中で、表現されるならば、
当然のことながら歴史は空間の移動という形で形成されてくると言わざるを得ません。

これを哲学的に言うと時間空間論を原理とした歴史についての、
歴史的な考え方であります。
実際問題そのことを歴史は実証しているのです。

我々が使っている時計というものは、
文字盤の上を針が移動することが時間ととらえることが多いようです。
けれども本当の時間は空間的なものではなくて、
純粋な一瞬一瞬の積み重ねにおいて変化していくものですけれども、
その一瞬一瞬で変化する時間というものを空間的に、物体的に表現すると、
場所の移動という形でしか表現できない訳です。

これは哲学的な時間空間論で言えばそういうなります。
時間を具体化したものが歴史なのです。
だから歴史というものは、空間の移動、場所の移動、風土の移動、
そういう形で形成されていかなければならない。

● 歴史からみた遷都の必然性

このように歴史を学ぶことでそういうことが必然的に見えてくる訳であります。
哲学的な論理は、いかんともあれ、歴史の現実は、
今申し上げたように、時代は常に風土を変えることによって、
遷都することによって新しい環境に時代の中心を移すことによって歴史というものが、
受け継がれてきたという事実あるということを
歴史法則として確認する必要があります。

このことを考えるならば、
日本に新しい時代を呼び興そう、日本に新しい発展段階をつくり出そう
ということを意図しようとするならば、我々は、何をしなければならないのか。
歴史的な観点から景気を復活させようと思うなら、何をしなければならないのか。
これは今申しましたように、
遷都、すなわち東京からまったく新しいところに、国の中心を移すということで、

国家に新しい活力を呼び興し、国家に創造力を作り出し、
民族の持っている新しい潜在能力を引き出してくるという、
そういう働きをすることになる訳です。

● 環境を変えることの大事さと環境変化という原理

これは遺伝子の研究で有名な、村上和雄先生の遺伝子理論からしましても、
潜在能力を顕現させるためには、
環境を変えるということが遺伝子の働きをスイッチオンにする触発効果を持つのだ
ということが証明されているのです。

そういう遺伝子理論から言いましても、
空間が固定化されるならば、新しい能力は目覚めません。
空間を移動する、環境を変えることによって、
前の環境の中では目覚めなかった新しい遺伝子が、環境を変えることによって、
環境の変化に触発されて、新しい遺伝子がスイッチオンになって、
そして目覚めてきて、新しい能力が出てくるということです。

そういう意味でも、日本という国家と日本民族に、
新しい可能性を切り開こうと思ったならば、
歴史学的な見地から言えることは、遷都の必要性があるということです。

● 東京という風土を、歴史的にみてみると

まだまだ東京は、発展的余地があると言われる方もいらっしゃる訳ですけれども、
東京、江戸に都を移してから、もうそろそろ 400 年になろうとしています。
江戸開幕は 1604 年。
2004 年で江戸が日本の中心になってから 400 年になろうとしています。
いかに広い関東平野といえども、400 年も経てばもうすでにその風土は、
その潜在能力をすでに出し尽してしまっていると言わざるを得ません。

現実に、人口の面においても、ゴミの面においても、またあらゆる環境面においても、
すでに東京は飽和状態です。
そのことを考えるならば、東京という都は、近代日本を支えた都だということで、
もうそろそろ東京という風土は、
近代日本を支えた都としての文化的価値を保存する時代に入った

と宣言しなければなりません。
これ以上、東京の再開発を進めて行って、
古いものを壊して、新しいものを作っていったならば、
大切な近代日本の歴史的遺産は、崩壊するといったことにもなりかねません。

その意味において、東京は、
京都と同じように東京は近代日本を支えた都としての文化的価値を保存しながら、
文化的な新たな発展価値を東京において実現しなければなりません。

● 遷都に目覚めて、日本を変える

そして、新しい日本の時代は、
東京とは違う、全く新しい風土に日本の首都を移して、
日本の新しい可能性を切り開くという発想を持つ時が、もうすでにやってきています。
この意識で、我々は目覚めなければならない。
この意識に目覚めることによって、
我々はこの不況から脱却することができるのであります。

今日の不況は経済不況ではない。
経済という枠組みを越えた、
もっと大きな見地から今日の不況というものは出てきているのであって、
この歴史的な対処方法というものをもちいることによって以外に、
日本を再生させるということはできません。
そのことを私は声を大にして申し上げたいのです。

● 原理的歴史不況を克服する遷都策

そして、遷都をするということになったらどのようにして遷都をするのか。
残念ながら今の政府には、何百兆円という大きな金を出せる余裕がありません。
まあ、景気回復という基本的な方法論というのは、
単純であって、景気を回復させようと思ったならば、
経済学的に何が大事といったならば、金を市場に流動させて、
沢山の仕事を作るといった景気を回復させるための基本的なやり方であります。

金を流動させて仕事を沢山作ったならば、景気はとにかく回復する。
実際問題今何回とはなく先進国首脳会談が度々開かれる訳ですけれども、

先進国首脳会談が開かれれば、
必ず先進国の首脳達は日本にどういう要求をしてくるかといったら、
早く日本は内需拡大という方法で、景気を回復させて、
世界経済を支える力を持ってもらいたいんだと言われる訳です。

なぜ、内需拡大という方法でと強調するのか言えば、
日本は世界に名だたる先進国なのだから、
いつまでも自分たちの作ったものを買ってもらって、
自分の国の経済を支えるといった後進国的な体質を早く脱却しなければならない。
先進国なのだから、日本は、内需拡大とい方法で景気を回復させて、
外国からものを輸入してあげて、外国の経済を日本が、
先進国として支えてあげるといったような、
経済の在り方に早くシフトしていってもらいたいのです。
これがＧ７の要求であります。

アメリカの経済はもうすでにおかしくなりかけています。
このままで日本の経済の復活がなかったら、
まさに世界はかつてウォール街の大暴落によって起きた、
世界同時不況という状況になるかもしれないといった不安が、世界にはある訳です。
そこでもしアメリカがうまくいかなくなったとしても、
日本が経済を復活させることに日本が購買力というか、
物を買ってあげるという力をつけることによって、
日本が世界経済を支えてくれるならば、安心ができるといったように、
Ｇ７の会議があればはやく日本は先進国の自覚をもって、
より多くの物を買ってあげて、世界の経済を支えてあげる、
助けてあげるといった、先進国に相応しい経済の在り方というものを
早く確立してもらいたいんだという G7 の要求であります。

けれども日本の政治家は、内需拡大という話を聞いてくると、
すぐに道路を作ろうとか、何かしら大空港をつくろうとか、大きな港を作ろうとか、
ただ公共事業的な発想でしか内需拡大ということしか頭に浮かばない訳です。

けれどその程度の内需拡大策では、日本の景気が浮揚しないだけではなくて、
決して世界経済を支えるほどの経済効果というものを持ち得ないというのが
現実であります。
日本が世界経済を支えて、沢山の物を輸入してあげながら、世界の経済を助けてあげる。

日本が世界経済に責任を持った行動をしようと思ったならば、
公共投資程度の、国内における経済活力を作っていくだけの投資額だけでは、
世界経済を支えられません。
もっともっと大規模な投資をするような大事業を考える事なしには、
日本は世界経済を支えることも、経済活力を出すこともできないのです。

それでは世界経済を支えるほどの経済活力というのは、
どういう方法で出てくるのかということになります。
今私が考えるところ、
東京から新しい所に都を移して、日本に新都造営の夢を掲げるという事以外に、
日本を救い、世界経済を支えるほどの力を持つことの方法論はありません。

ところが、それほどの経済力を持った大事業というものは、
何百兆円という金を必要とします。
けれどもその金は政府にはない。
実際問題、これまで、百兆円に満たない 50 兆円、80 兆円といった、
いろんなレベルの金を、政府は市場にばらまいて来ました。
しかし、景気にはさしたる影響がない。なぜか。
それはバブルの崩壊によって発生した不良債権の利子の支払いに
政府が放出した税金は全部銀行が吸い上げてしまった。
そしてその不良債権処理のために、銀行が使ってしまうから、
だからせっかく市場に放出した日銀の貨幣も、政府が放出する税金も、
何の役にも立たない状況で、
まったく経済の活力を生む力を持たなかった訳であります。
不良債権という重しが、経済にかかっているからです。

現在の不良債権は最低で 100 兆円もあるんだということがわかってきて、
ひょっとしたら、200 兆円以上、300 兆円以上もあるかもしれない。
まだまだ目に見えない不良債権が、まだまだ存在するそれだけではない。
この不況が続くことによって、毎年毎年その借金は増えていって、
新たなる不良債権がどんどん発生しているという状況なのです。

政府がどんなに何十兆円という金を使おうと、
100 兆円を超える規模の投資を一時にしなければ、
不良債権の額を超える投資をしない限りは、
いくら金を使っても、金をドブに捨てるようなもので、何の経済効果もない。

このことをもっともっと真剣に考えるべきであります。

ほとんどの金は、不良債権から発生する利子の支払いに全部消えてしまっている。
そして不良債権は、倒産によってますます増え続けているのです。
そのことによって政府は、蟻地獄のようなどうしょうもない状態に陥ってしまっている。

小泉首相がいろいろな改革をしようとも、改革レベルでは景気は回復しません。
これは過去の江戸時代の天保の改革や享保の改革を見ても、
改革はますます不況に追い討ちをかけてしまって、ますます国民を困らせるのです。

● 間違った考え方の間違った政策で、苦しめられるのは国民だ

現代でも改革と言えるのは、具体的には、増税です。増税は悪政です。
国民を困らせる政治なのです。
だけども、東京都においても、地方においては財政は窮迫している。
ですから、石原都知事も増税の策を講じて、国民から税を取ろうとしている。
あるいは、カジノを作って、そこで泡銭を吸い上げて、
東京都が胴元になって博打をしようという発想も出てくる。

東京都だけではなく、三重県も賭博場所を作って地方財政の欠陥を補おうとしている。
そういうところが、どんどん増えてきているのです。
日本国中、総賭博というような感じになってきているのです。
そういう博打的な発想で、市が金儲け的なことをしようとしている。
ちょっと間違った方向性に行きかけてしまっている。

結局は税金の不足をどう埋めるかといった、何か取る事しか考えていない。
それは官僚政治の欠陥というか非常に大きな問題ですね。
けれども結局は、何が一番問題の根っこというかかと言いましたら、
それは不良債権です。

それは、誰もが知っている不良債権が今の景気の重しになっている。
けれどもその不良債権が何なのかというと、
株価の暴落と、土地の値段の急激な下落によって生じた不良債権なのです。
だから株価を上昇させて、土地の値段を上げてしまえば
何もしなくても不良債権はチャラになるものです。

●　やはり、本格的な遷都しかない

どうしたらそれが出来るのか。それは遷都です。
遷都をするということを発表したら、まっ先に建築株と土地は暴騰します。
遷都というのは、単純な事業ではありません。
国会議事堂を建てて、官庁を建てて、
通信インフラ、交通インフラあらゆるものをちゃんと整備しなければ、
首都はできません。
全産業がかかわらなければ首都はできない。
何百兆円という金を使った大遷都になってきます。

それなりの影響力のある政治家がポッと口に出したら、株価は暴騰します。
現在の株式市場の常識から言いましたら、
株価の面から発生している不良債権は、株価が 23000 円を超えれば、
全部チャラになると言われています。

遷都と言えば、今政府が考えている遷都は分都構想です。首都機能の分散なのです。
そんなチッポケなことでは、世界経済を支えることが出来るような、
そんな効果は生まれません。
ましてや、日本経済も支えられません。
分都構想で今考えられている資金は、何十兆円といった規模なのです。
その程度の資金は毎年毎年、市場に放出しているのです。
何十兆円規模の分都構想の首都機能の分散といった程度のことでは、話にならない。
実際問題、Ｇ７で日本に要求されているような、そういう規模の事業ではない。

本当に日本経済が世界を支え、また不良債権を何とかしようと考えるならば、大遷都。
首都を東京から全く違った場所に大移転するといった、
この大事業を発想、構想すべきです。
何百兆円といった金が動くそういった事業を構想すべきなのです。
そうするならば、株式市場はたちまちにして動き始めるのです。

いかに首都周辺の土地の値段を固定化して、暴騰しないようにしても、
首都そのものの土地の値段を固定化しても周辺は上がってきます。
全国の土地の値段は上がってきます。
上がった分だけ、土地の不良債権が減ってしまうといったことになる訳です。

銀行は、持っている株式と資産価値がどんどんと上がってきて、
そして債権の評価額が上がってきますから、どんどん金を貸しやすくなる。
もっともっと産業活動に、金融活動に援助しやすくなってくる。

そして新都造営というのは、莫大な労働力、莫大な仕事量を誘発させるものであり、
失業なんて、いっぺんに吹き飛んでいってしまう。
日本人だけでは足りないなら、どんどん外国人の方にやってきてもらって、助けてもらう。
その面においても外国の経済を助けることになる。

● 遷都の資金はどうするのか

それでは、そのお金はどうするのか、どこかから出てくるのか?
政府には金がない。もう政府は 6 兆円ほどの国債を抱えていていますし・・・。
もうこれ以上国民に対して借金を増やしてしまったら、
金を返せんという状況になってしまって、国政はパンクする。
もうこれ以上この債権、国債を増やすことはできない。

政府は金を出せないのに、遷都なんてできるはずがないと思うかもしれません。
けれども、大事なことは政府は貧乏だけど、国民はお金を持っているということです。
ただし、誰が持っているか知りませんけど。
計算上は 1400 兆円という、莫大な金融資産が日本人の貯金として、眠っている。
海外預金とかいろんな形で、流動資産が貯金として眠っている。

大体その経済学的な常識として言ったら、
1400 兆円もの使わなくてもいいようなお金を持っていて、
毎年毎年貿易黒字で、どんどん外貨貯金が膨れ上がっていって、何で不況なのか!
「おかしいじゃないか」と言わざるを得ません。
不況の原因はお金を使わないから。お金の使い道がないから。
そんな莫大な金を何に使っていいか政府は見当もつかない。
1400 兆円のお金を、使い得る使い道を示すことができないから使ってない。
その上に未来への不安がありますから。
高齢者の方々は、未来への不安に備えて、お金があったら貯金をすると言う状況で
お金を使わない。ますます不況に追い討ちをかける。

経済の活力を作っていくためには、お金を使わせなければならない。
市場にお金を誘導させなければならない。

そして、仕事量を作らなければならない。
政府は金が無いから、新都造営と言っても、そんな沢山な金を出せない。
誰がそれを出すのか?それは国民が出すようにする。
国民みんなが、自分の持っている貯金の中から、
１割を捻出して、無償で未来の日本のために自分の貯金の１割を放出する。
そうすれば計算上は 140 兆円という金が集まってくる計算になる。
子供でもですね、自分の持っている小遣いの１割を出して、
おれも新しい日本のためにお金を出したんだという夢を子供に買ってもらう。

● 国民が、自分たちのためにする新都造営

大遷都は、国民全体に限り無い夢を与えます。
子供たちにもですね、大きな希望と夢を与えることになってくる。
そして、その 70 才までの方は、未来の人のために身銭を切ってお金を出してもらう。

だけれども、70 才以上の方が出していただいたお金に関しては、
政府が責任を持って 7%から 8%の利子をつけて返すという保証をする。
そのくらいのことがあれば、政府は国民から上がってくる税金によって、
支払うことは可能であります。

そういうことをするならば、お年寄りの方々は、
為替リスクを確保して、危険な海外貯金をするようなことをするよりも、
日本のために国に金を出して７%、８%ぐらいの利子がつくんだ、
それで老後は大丈夫だといってね、金が日本に環流してくる。

もしそういうことを考えたならば、老人は、７%、８%現実にやったならば、
１割どころじゃないですよ、半分は出そう、もう全部振り込もうと、
わんさか金が集まってくるかもしれない。

また企業もね、遷都という事業が、最低限度 50 年から 150 年かかる大事業です。
だから最低限度 50 年間は、日本経済は右片上がりの急成長が続くんです。
そのことがわかってくれれば、企業も安心して設備投資ができる。

また国民も、50 年間は、安心して給料が毎年毎年増え続ける。
安心してローンが組める。金が使える。
そうなってくれれば、企業も、将来出てくる利益を先取りして、

国のために莫大な寄付をしようというような善意を持った事業を出てくるかもしれない。

そういうことを考えれば、計算上 1400 兆円の 1 割で 140 兆円が出てくるのです。
そうすればもっと出してくれる。
企業もまあ、寄付をする。
そうすればたちまち 300 兆円、400 兆円、500 兆円という金が集まってくるかもしれない。
最低でも 200 兆円ぐらいの金は作らなければならない。

● もう国を頼ってはいられない。国民が国民のための施策としての遷都をやる

国民が自ら身銭を切って、その金を吐き出すことによって、

「おれたちが新しい日本を作るんだ、おれたちがやらんことには、国は動かん、
　教育も社会もおれたちが変えるんだ」

という意欲を持って、国民は立ち上がらなければならない。
「親方に頼んでおったら何とかなる」というような
古い、封建主義的な時代の考え方を捨てて、
本当に国民の力でおれたちの国を作ろうという気概を持った時代が
これからの日本で始まるのです。

そして、200 兆円、300 兆円という金で、新しい所に国民が土地を買って、
国民が首都を作って、国民が作った首都を政府に貸すのです。
そしてこの 70 才以上の方が出してくれたお金に対して、
その７%から８%ぐらいの利子を付けて返すその政府が、
70 才以上の方に払うその７%、８%の利子が、首都の借り賃。
国民が作ってくれた首都を政府が借りて、借り賃として、70 才以上の方に老後のですね、
生活の資金として、利子として払うそれが、貸借料、借り賃として払う。

70 才までの人間は、身銭を切って、未来の日本のために金を吐き出す。
それくらいのですね、犠牲は払っていい。自分が出した何百倍の金が将来返ってくる。
日本経済が復活すれば、たちまちにして給料が倍になってくる。
しかもですね、こういう大きな投資の国家的な発展がもたらす経済の波及力というのは、
10 倍と言われているのです。

ですから日本人が 200 兆円の金を吐き出して、

そしてその金を国内で流動させるならば、海外からその 10 倍の金が流入してくる。
そうしたら日本は大金融センターです。
日本がそんなに発展するなら、
その日本の土地を買おう、建物を買おう、日本に家を建てよう、
日本に会社をつくろう、出張所つくろうと、
莫大な金が海外からどんどん日本に流れ込んでくる。

波及効果は 10 倍。即ち、2000 兆円という金が日本の中で渦巻き、
たちまちにして日本の経済は、急成長を遂げる。
国民は今もらっている給料の倍をもらえる。
そして、株式が 10 万円時代がくる。
今どんな株を持っていても、最低でも 10 倍に上がる。
それがこれからの日本の未来なのです。

外国から資金がどんどん流入してくれば、
アメリカの株も、8000 ドルか 9000 ドルかっていった時代から、
たちまちにして、10 万ドルのですね、時代になっていくのです。
今は 11 万ドル 12 万ドルまでいったのが下がってきて、今８万ドル代になってますけど。
やがてこれがもっともっと暴落していって
６万ドルくらいまでにはなっていってしまうでしょう。

そして時間を経過していきながらそしてどんどん下がっていって、
アメリカの没落が始まるという時代になって来る訳であります。
その時に日本は、まさにこの日の出ずる国という活力を獲得し、
世界を支えなければならない。そういう役割が日本にめぐってくる訳です。

●　「新都造営・遷都」それは世界の要望、期待でもある

まさにＧ７において各国首脳が日本に要求していることは、一体何なのか。
それこそまさに、大遷都そのもの、大遷都こそ、大遷都だけが、
Ｇ７各国首脳が、日本に世界経済を支えてくれと、
そのために内需拡大をやってくれと、内需拡大を達成してくれと言っている期待に
答える唯一の事業だと言わざるを得ないのです。

まずは何をするかが大事なのです。
まず遷都をするということを決めるか否かが問題なのです。

あとは頭のいい人間がたくさんいるんですから
皆で考えれば、答えは出るんです。
やることが決まったら、どうしたらやるかは、誰か考えたらいいんです。

とにかく今、不良債権の、重しをとろうと思ったらね、、この遷都の方法しかないのです。
もしそれをしなかったらね、国民はもっともっと悲惨な状況に陥ります。
毎年毎年、増税増税でね、ますます消費税は増えていく。
ますます間接税は増え、直接税も増える。
それは市町村の経済がパンク状態になるんですから
遷都という方法を用いなければ、増税をするしか、地方財政はもたなくなる訳なのです。

● カジノなんてやってる場合じゃない

しかも今カジノなんて言ってますけどね、全国にカジノができたらどうなりますか。
１ヵ所２ヵ所なら人は集まって来ますが、
みんなが作ったら分散します。そんな大きな儲けにならないんです。
僕が住んでいる鳥羽市でもね、カジノを作ろうなんて言っているんですから、市の単位で。
町の単位で言っているところもあるんです。
村の単位でカジノを作って村起こしをしようなんて、
そんなことを言ったらね全国カジノだらけになってね、どこに行くんやっていってね、あっちこっちで分散しますからね、もうけるところの話しではないんですよ。

国のバランスのとれた発展ということを考えるならば、
カジノはこの県に作ろう、このことはこの県にやらそう、
その県の持っている特徴をですね、はっきりさせながら、
各県に、まったく質の違ったいろんなものを作って、
特色のあるものを作っていかないと、
同じ物を全国に作ったのでは競争になりますからね、共倒れなんですよね。

そういう指導力もね、政治が発揮してやらないと、
やらしといて結局国民を困らせるような結果になってしまうのです。
カジノをするなら東京だ、ボートをするなら浜名湖だ、競馬なら京都だと、
いろいろと分散して特色を作っていったら、その集団で動きますから、
その時は儲かりますよね。あっちこっち作ってしまったのでは、
競争になって、却って投資額を回収できなくなります。
コンビニの乱立と同じですよねこれは。

● もう政治家に任せていられない状況まできている?!

そんなことすら、政府は計画を持っていないのですから。
勝手にやってくれっていってるんですからね。

昨日電車の中で、夕刊フジか、夕刊ゲンダイか、
もう政府のことボロクソなんですからね。
アメリカにも相手にされない竹中金融経済大臣、世界中から見放されている小泉無能政権に、この国をもうこれ以上まかせていたらいよいよお終いになる。
小泉の政治は、大量の倒産、失業のみたてを覚悟して不良債権処理を進めるのか、それとも時間稼ぎの先送りでごまかすのかいっこうにはっきりしないでたらめさはかけん。この大事なときに何もしない小泉政権は、まだ支持していいのですかとかね。
　全てをまるなげ、自分は正月そうそう歌舞伎見物にうつつをぬかし、何をやっていいのかわからないこんな首相も首相だが、まるなげされている竹中平三というインチキ学者に国の経済を握られていたら、今年日本はにっちもさっちもいかなくなることは必至である。と書いてある。もうボロクソですよね、これは。

● 改革ではなく、変革。小手先ではなく、原理的変革こそが大事

こんな不安を国民に感じさせているという状況があるということです。
改革というものは、改革を進めたことによって、
損をする人間と得をする人間と半分に分かれてしまうんですよ。
結局は賛否両論になってしまってね、良い結果がでないのが改革なんですよ。
改革で成功したためしがない。

改革というのは、クリエイトではないのです。
今の原理原則を変えないで、なんとか問題だけ処理しようという姑息な方法なのです。
ますます悪化していくだけです。
本当に歴史をつくろうと思ったら、改革じゃダメなのです。
原理的な変革を成し遂げなければならない。
その原理的な変革の歴史的な方法が大遷都です。

まあとにかく、選挙で選んでおきながら、
後から文句をいう国民も国民ですけどね。
やっぱり選んだからには、みんながそれを支えて、
応援してバックアップしてなんとか努力しやらせるようにしなければならないのに、

悪いとなったら文句を言うような国民も国民なのです。
総理も総理なら国民も国民なのです。
みんながそんな状況になって何ともならんようになってしまってるのです。

● 国民がつくって、国民が政府に貸す

とにかく国民が金を出して、土地を買って、新都造営、首都を造って、政府に貸す。
政府は 70 才以上の人には、金利７％～８％の利子をつけて返す。
それが首都借り賃なんです。
政府に金がないんだからね、借りて仕事をする以外ないんだと、
今我々は決断しなければなりません。
国民が立ち上がるしかないんだと、
今この切羽詰まった状況を認識しなければならないのです。
国民以外救えないんです。
政府はお金が無いけれど、国民は金がある。
もう国民しか国を救えないのです。
国民が国を救わないで、誰が救ってくれるんですか。
外国人に国を救ってくれなんて言えるようなそんなバカなことはできません。
国民が自分の国を救う以外ないのです。

遷都こそまさに子供たちに限りない夢を与えて、
全企業を活性化させ、そしてたくさんの仕事量をつくって、
そして金が全国に流通していく、唯一のこれは、活性化策です。

そして、老人対策として、70 才以上の人が出してくれた金に対しては、
利子を政府が責任をもって払う。
経済が活力をもって、税金が増えれば、70 才以上の方が出してくれた金に対して、
７％、８％ぐらいの利子を付けて返すくらいの資金は十分出るはずなんです。

そしてこの遷都をするって言うだけで、株価は暴騰する。
そして首都周辺の土地の値段も上がっていく。
不良債権はなんにもしないでもチャラになる。
そして株価はやがて 10 万円台になってくる。
皆の持っている株は、最低 10 倍という価値を持ってくる。
そうなって初めて日本人は真の豊かさを実感することができるのです。
そういう時代になり得る訳であります。

● 私たち日本人が豊かさを感じない本当の理由

なぜ、日本人は今日の経済状況を、
この全世界の標準からしたらはるかに恵まれているこの経済状況の中で、
まだ真の豊かさを感じていないのは、
この状況に満足するか満足しないかは、その人間の持っている潜在能力に関係します。

潜在能力が大きければ、いかに豊かな状況にあろうとも、
その段階は不満と感じる。
満足するか否かは、感性が関係する。
感性に関係するものが、潜在能力です。
潜在能力が大きければ、この程度じゃまだ物足りない。
そういう思いを持ってくるのは、原理であります。

今日本人がこの恵まれた現在の経済状態で、
納得できない、物足りない、まだ不満だ、もっと豊かになりたいというのは、
日本人が持っている潜在能力が、もっと高い所のものを目指しているからです。

潜在能力が、この程度では、納得できないという能力を持っているということなのです。
だから今日の経済状況でもまだ日本人は真の豊かさ感じないのです。
感じるか感じないか、満足できるか満足できないかは、感性が握っている。
そして現状の満足できるかは、潜在能力が多いか少ないかによって関係する。
潜在能力が小さければ、ある程度の状況で満足してしまう。
大きければこの程度では満足できんぞと、
俺はもっと上を目指すんだという意気込みが出てくる。
それは潜在能力に関わる心情なのです。

だからこそ今の日本人が、この状況に満足していないということは、
民族の可能性はもっと大きい、そのことを我々は知る必要があるのです。

● だから、なおさら首都を東京の留めておいてはならない

その意味においても、日本人の潜在能力をさらに引き出そうと思ったならば、
いつまでも東京に都を置いておいてはなりません。
環境を変えることによって、風土を変えることによって、
眠っている潜在能力を刺激して、眠っている潜在能力をスイッチオンにして、

まったく新たなる新しい潜在能力を顕現させて、
新しい時代をつくっていくという仕事を日本人はするべきです。

● 遷都は、広島。コンセプトは、世界平和

それでは、遷都するということでどこに遷都するかというと、
いよいよその具体的な問題は入る訳です。
どこに遷都するのか。
遷都する場所は広島であります。
しかも広島だけではありません。
日本の未来は広島を中核とした中国５県の大首都圏として総合開発を進めていく。

すなわち、広島、山口、島根、鳥取、岡山の５県を大首都圏として総合開発をする。
その意味はどこにあるのか。
これから世界は、アジアの時代が始まるのです。
だから我々日本人は、アジアを睨んだ首都を造らなければならない。

そのためには、首都は西の方向に持っていかなければならない。
しかも日本の国土のバランスのとれた開発ということを考えるならば、
これまではあまりにも日本の国土は大平洋側に偏った開発をしすぎてきてしまった。
もう大平洋の時代は終ったのです。
アメリカとの関係は、だんだん薄れていく方向性です。
これからは、日本海側の時代なのです。
日本海をはさんで日本がアジアに目を向けて、
アジアとの係わり合いをもっともっと深めていく時代に入っていくのです。
これからは、日本海の時代が始まるのです。
だからこそ日本は、日本海側の風土に光りを当てなければならない。

● 日本海文明の幕開けは、新しいアジア文明の始まり

日本海には、日本海独特の日本固有のさまざまな文化が眠っています。
日本海側の文化分明に、光を与えることによって、
日本国土のバランスのとれた発展というものを考えるべきです。
そして、日本海側に大空港をつくる。日本海側に大きな港をつくる。
そして、アジアとの関係強化に努力していく。

そして中国５県が大首都圏として発展するならば、本州架橋は生きてくる。
四国もまたともに大発展を遂げる。
また３本の本州架橋が経済活動の動脈となって
大きな収益を上げことができるようになってくる。

今残念ながら中国と四国の関係、２つを結んでいる本州架橋は赤字の状況です。
あまりつくった効果を本州架橋の効果といったものをまだ発揮することができていない。

また中国地区５県が大首都圏として開発されるならば、
そのもっとも近いところにある四国は、大きな経済発展の可能性を持ってくる。
四国もまた活力を持ってくる。

また、なぜ、広島を中核とした中国５県という開発を考えるというならば、
それはこれからの人類が目指していかなければならない、全人類共通の理念は、
平和だからです。
そしてしかも日本人は、平和の盟主として、これから全世界のために、全人類のために
活躍しなければならない時代に突入するのです。

平和の原点と言いましたら、何といっても広島というのが世界の常識であります。
広島を首都の中心とするならば、新しく日本にできる首都は、
まさに平和を理念として人類の首都となるのです。
広島を首都とすることによって、日本の首都は、全世界の首都となって、
世界から歓迎され、世界から関心を持ってもらえるのです。

その意味においても日本人が、最終的に国の首都として、
しかも平和の盟主として世界的に活躍していくこの使命を自覚した時に
日本人が考える首都は広島しかありません。

中国地方に日本の首都を持っていくというこの発想は、
ただ単にアジアの時代であるから、西の方にというだけではありません。
これからの人類は、平和というものを全人類が目指しながら、
その理念として生きていかなければならないという、
むこう 1000 年の首都構想なのです。
そして世界が容認する平和の理念は、広島です。
広島を日本の首都にすることによって、
日本の首都は世界の首都になる。

世界の中心としての価値を発揮することになります。

そして広島を中心にして、中国５県という私の夢はどこにあるかというと、
どうしてその地方が中国という、
国の中心という名前を持っているのかというこの意味にも目覚めなければならない。
どういう気持ちで中国地方という名前を持ったかというと、
そういう名前を持ってしまっているということに、
その風土の運命といいますか意味を見い出す必要もあるのです。

● アジアの中心・広島と中国地方の連係により世界に発信

そういうことで、北海道から九州までの国土を考えて、日本の中心と言った場合、
確かに日本の中心は、岐阜県です。
けれども沖縄県まで含めて日本といった場合には、中心はちょうど広島県です。

すなわち、広島市と福山市のちょうど中間地点くらいで日本のど真ん中です。
中国地方に日本のど真ん中がやってくるのです。
沖縄が日本に返還されて、沖縄県ができたことによって日本の中心は、広島になる。
いろんなことが重なって、広島というこの風土が、非常に意味を持った、
風土というものに解釈できる訳であります。

そしてこの中国地方５県というのは、
日本海側と瀬戸内海とそれから四国をはさんで大平洋側の方に、
この日本海側に目を開いて、新しい国土の発展というものを考えて、
日本の国土の成長発展を考えていく場合に、
非常に価値のある新しい日本の可能性をつくり出すことができてくるのであります。

四国もあまり今日までは活かされてきていません。
中国地方もまた今日まで活かされてきていない。
その四国と中国が持っているこの風土の特色を、
もっともっと成長させるというか、奮い立たせていくなら、
東京を首都とした時代が持っている日本の雰囲気とはまったく違った、
日本の雰囲気、日本の在り方が見えてくるはずであります。

● 真の文化・文明の始まり

そして我々は、
この中国 5 県と四国を大首都圏として開発するそのことを通して、
先ほどこの 21 世紀の使命で申しました科学技術力の粋を集めて、
現在世界に存在する科学技術の粋を集めて、
もうこれ以上素晴らしいものはない科学未来都市は無いというような、
環境とのバランスのとれた真の文化といえる大首都を造らなければなりません。

文化とは何なのか。文化というのは、人間としての共同作業です。
自然に存在するものに対して、人間が手を加えて、自然を自然のままでおいていくより、
もっと素晴らしいものにしていくという活動が文化なのです。

自然を破壊するものは文化ではない。
自然を壊すのは文化ではない。
自然の命を活かし切って、
自然のままで放っておくよりもっと素晴らしいものにしていく。
人間が手を加えることによって、自然を自然のままに放っておくより
もっと素晴らしいものにしていくそれが真の文化の理念であります。

文化という言葉は、カルチャーです。
カルチャーというのは、クルタスという語源から始まっています。
クルタスというのは、耕すと言う意味です。
自然に存在する土地や自然に存在する稲に人間の手を加える。
そして、自然のままに放っておくよりも人間の手を加えると多くの収穫量があり、
寒さにも耐え、北風にも耐え、そういう状況に稲を改良していく。
まず土地を耕して、土地に活力を与えていく。それが文化の根元なのです。

真の文化の在り方を、我々は中国地方を首都にすることによって
世界に見せなければならない。「文化とはこうだ」と。
いかにも文化と言えばヨーロッパを見本にして、
あらゆるものを人間本意に変えてしまって、
自然を抹殺して、人間が自分が生まれたところに自然を変えてしまう。
それを文化と思ってしまう西洋人が多い。
しかしそれは自然の破壊なのです。
文化とは、自然を人間の手を加えることによって、

自然のままに放っておくことよりもっと素晴らしいものにしていく。
それが文化の基本的な理念であります。

この文化という、カルチャーという言葉を職業の名前に持っているのは、農業だけです。
農業はアグリカルチャーと言われます。
すなわち農業こそ文化の原点。
文化とは何なのかと考えると、その土台は農業にはあります。
だからこそ農業だけはカルチャーという名前を擁しています。
我々は真の文化の在り方を
世界の首都となるべき、日本の新しい首都において、表現しなければならない。

そのことにおいても日本人は、
世界の指導者となって、世界に範を垂れて世界を導くという仕事をしなければならない。
そして我々は、科学技術力の粋を尽くして、全世界に冠たる大科学未来都市を構築する。
そのことを通して日本人は、
近代科学技術文明の首都を表現することによって完成するのです。

そこには、広島には、核廃棄物を処理するための大研究センターが、
新しい日本の首都をつくることによって、
日本人は 21 世紀における日本の使命を果たすという仕事を成し遂げることになるのです。
自然破壊、環境破壊、人間性の破壊、核廃棄物の心配のない、
そういう素晴らしい未来都市をつくり、
世界にその素晴らしい都市を見ていただくのです。

そして全世界の方々に、
死ぬまでに１回はあの日本のあの素晴らしい大科学技術未来都市を見てから死にたい
という、ちょうど昔日本人が、死ぬ前に１回お伊勢参りをしてから死にたいといった、
あのお伊勢参りと同じに、日本に全世界の人間が、日本参りやってきてですね、
あの首都を見てから死にたいと、
あの首都を見なければ死んでも死にきれないと
そういうふうに世界の憧れの的になるような首都をつくらなければならない。

また、そのようなことが、日本として大きな夢にもなる訳です。
これから我々がつくらなければならない首都は、世界の首都なのです。
これからの人類というものは平和というものを目標として、
歴史を作っていくならば、

まさに平和の原点としての広島こそ新しいエレサレムになれるかもしれないのです。

● 意志を持って、自覚的に遷都・新都造営を進める

遷都という問題は、必ずいつかやらなければならないことなのです。
どこかでいつかやらなければならないという時期が追い詰められるようにやってきます。
しかし、追い詰められるのを待っているのではなくて、
それを自覚的に先取りして、やってしまおうというところに
人間的にこの歴史を作るという因果律に押されてやってしまうのではなく、
因果の流れを先取りしながら、人間が因果の力に支配されないで、
因果の力を利用しながら歴史をつくっていくという、
新しい人間的な段階に入る意味がある訳です。

風土には個性があります。風土には潜在能力の限界があります。
だからその限界を超えたら、もうその場所は国力を発展させる力を持たない。
だからちゃんとそのことを計算して、
考えながら国民を苦しい状況に追い込んでしまう前に、
遷都を実践して、新しい発展段階をもたらしていくという、
意識的な努力をするというところに、
自覚的に生きる人間の価値が出てくるのであります。

我々は歴史を自覚的につくっていくという、
そういう段階にこれから入らなければなりません。
ある意味でこれまでの人類の歴史は、人類史における前史であり、
これから初めて我々は、
人間として人間の歴史を主体的に作っていくという歴史に入るのです。

● 真の人間の時代に為すべき事

これまでは、人間は人間でありながら、人間に目覚めていない。
これまでの人類は、古代においては力に憧れ、中世においては、神仏に憧れ、
近世においては理性に憧れており、人間であることを恥じていた。

ようやく我々は今、人間であることに目覚めて、
人類における人間の時代を体験するのです。
そして、人間として生んでもらったことに感謝をする。

そして、母なる宇宙に感謝して、
「お母さんありがとう、よくぞ人間として生んでくれました。人間でよかった」と、
人間であることに感謝をし、人間であることに誇りを持ち、
人間として生きていくことに喜びを見い出しながら、
生きていく人生をこれから生きていくのです。

ようやく人類は、人間としての歴史をつくる出発点に今立ったのです。
そのためにも、どうにもならなくなるまで、放っておいて遷都をするのではなく、
自覚的に意志を持って歴史を作っていくという作業をしなければなりません。

明治維新のように、お互いに殺し合ったり、
そういう状況で革命で歴史をつくるような、
そんな歴史はもう終りにしなければなりません。
我々は、自覚的に、時代の問題を先取りしながら互いに殺し合うことなく、
より素晴らしい未来をクリエイトしながら、自覚的に歴史をつくっていく。
そういう生き方ができるようになって、初めて人間的であると言えるのです。

その意味でも、まず遷都をしなければ日本の未来は始まらない。
そのことを視野に入れながら全国民が遷都の問題に、
互いに議論し話し合うその環境をつくっていって、
そして国民の力で、新しい日本をつくろうという夢に生きる時代を、
我々はこれから導いていかなければならないと思うのです。

● 山積するだろう問題の意味

遷都の問題は、非常に困難な問題も出てくるでしょう。
だけれどもやりながら出てくる困難な問題は、
それこそまさに人類の、まだ開拓されていない潜在能力を導き出して、
人類として進化し成長していくプロセスを作ってくれるための問題なのです。

問題が出てくることを怖れてはならない。
人生とは問題を乗り越え続けることなのです。
歴史とは、問題を乗り越え続けることなのです。
経営とは問題を乗り越え続けることなのです。
問題があるから発展できる。
悩みがあるから成長できる。

問題の無い、悩みのない人生というものには成長は無い。
我々は問題の発生を怖れてはならない。

問題が出てきたからといって、間違えたと思ってはならない。
出てきた問題を乗り越え続けることが、歴史をつくることになる。
出てきた問題を乗り越え続けることが人生なのです。
出てきた問題を乗り越え続けることが経営なのです。
人間そのものは不完全だから、どんなことをしても必ず、問題は出てくる。
問題の出てこない方法はない。
何をしても問題を作ることになる。
問題の出現を怖れてはならない。
出てくる問題を乗り越え続けることが、人生であり、歴史をつくることです。

どんな問題が出てこようと、
それは人類の潜在能力を引き出すために出てきているのです。
そしてそれに果敢に向かっていくことが、まさに生きることそのものなのです。
単純に自然破壊、環境破壊、人間性の破壊、
そういうものの問題が出てきたからといって、
今の自分達は間違っていたともうこれ以上生産活動をしてはならないと、
自然に返れとまさにこれは、反動的にはそうです。

● 問題を乗り越え続けながら、新しい時代を拓く

我々は出てくる問題を乗り越え続けることによって、
もっともっと素晴らしい文明、世界を作って行く、そういう生き方をしなければならない。
問題が出てくることを恐れる事、
それはまさに理性の奴隷になった人間の恥かしい違った迷いの判断です。
理性は人間に完全性を要求します。
理性的であれば問題が出てくると問題かなあと思ってしまうのです。
理性においては、問題が出てくることは間違いなのです。
問題が出てこない道が正しい。
だけれどもそれは理性の問題なのです。

人間の人生においては、問題は出てこなければならない。
しかも問題の無い人生は無い。
どのような状況においても問題は無いというような人は、

現実が見えていない人なのです。
問題がないのが素晴らしいのではない、問題の無いことが間違いなのです。
問題のあることが正しいのです。問題の無いことは間違いなのです。
本当の現実が見えていないのです。
どんなに素晴らしい現実の中であっても問題はあるのです。
問題がなくなったら歴史は終るのです。問題があるから歴史はつくられるのです。

自然破壊という状況が出てきたからといって、ひるんではならない。すくんではならない。
自然破壊を文化の文明の発展で乗り越えていく。
それしか人間の生きる道はないのです。
自然破壊という問題が出てくるということは、
新しい潜在能力を引き出すために今自分たちの持っている力ではなんともならないという
その課題が出てきてくれているのです。

人類は自らの活動によって問題をつくり出しながら、
その問題によって自らの潜在能力を引き出して、進化し成長し歴史をつくり出している。
それが人類史なのです。

どんな問題が出てきても我々はひるんではならない。
不可能を可能にする人生。
それはまさに人間として生きるということです。
どんな問題が出てきてもそれを乗り越えるということが歴史を生きるということです。
問題は自分を成長させるために、
人類を進化させるために出てきてくれているんだということを、
この認識を歴史哲学として求めるのです。

● 日本の証明、日本人の証明

その意味でも、我々は今我々が抱えている様々な人類の問題、
自然破壊、環境破壊、人間性の破壊、核廃棄物この４つの核について、
償って、そして近代科学技術文明を、もうこれ以上ない科学技術文明までもっていく、
その仕事の仕上げとして、日本は新都造営の大事業を成し遂げながら、
その新都造営の中で、
科学技術文明を完成させるこの仕事を成し遂げていくという計画を
成し遂げていく必要があるのではないかと思います。

それが新しい日本の未来をつくる発想であり、
また日本人が民族が持てる最後の力をふりしぼって、
人類のため世界のために貢献できる最後の道であります。
そのことをすることによって、日本には新しい誇りが出てくる。
日本人はこんな素晴らしいことをして、
人類に貢献してそして衰退していった民族なのだという歴史をつくらなければならない。

● 日本の誇り、日本人の誇り

もしこのままで日本人が世界の何のお役にも立たずに、
このまま衰退していってしまったならば、日本人とはいったい何だったのか。
第二次世界大戦では侵略者であり、
戦後においてはエコノミックアニマルで、
日本人は世界から非難されバカにされたままで終ってしまわなければならない。

日本の伝統文化を考えるならば、
そんなみじめな状況で衰退していってしまうような、
そんな価値の無い民族ではないのです。
我々が今日まで作ってきた伝統文化は、これからの人類にこそ役立ち、
価値の出てくるものなのです。

我々はこれからの生き方に、これからの生き方を通して、
子供たちに胸を張って、
誇りを持って生きていくことができる日本人の誇りというものを子供たちに与えて、
残して死んでいってあげなければならない。
世界から尊敬され、世界から賞賛され、感謝されるような歴史をつくって
我々は舞台から去らなければならない。

そのために、やらなければならない仕事が、
遷都という世界のためになる大仕事であります。
それをして初めて日本人は、民族の誇りを感じながら、
また民族の誇りをつくって、そして歴史を去ることができる。

このままで世界から非難され、世界からバカにされて、このままでくたばってなるものか。
我々はそんな価値のない卑しい民族ではない。
我々はもっともっと素晴らしい価値の持った民族なのです。

その誇りを我々はこれからこそつくっていかなければ、
これまでの民族の祖先の方々の努力に報いることはできないのです。

特に第二次世界大戦において、
国を守るために、愛するものを守るために命を捧げて死んでいった英霊たちに、
命のこの価値に感謝し、その価値に答えるような生き方をしていかなければ申し訳ない。
そのためにもどうすれば自分たちは世界のために役立つことができるのか、
どうすれば人類の役に立つことができるのか。
その事を日本人は民族を挙げて考えなければならない時を迎えているのです。
それが、第三の過渡期を担って活躍しなければならない日本人の自覚の仕方であります。

ぜひ、新都造営という大事業の持っている歴史的価値というものについて、
日本人全体が、議論をし、そして日本の新しい希望の持てる未来をつくり出し、
世界に貢献できる歴史を作っていくという生き方をしたいものです。

そして、今、ここから、それが始まることを祈念するものです。
ともに、21 世紀の日本をつくっていきましょう。

■関連図書のご案内

●【感性論哲学・思風先生図書リスト】(税別の金額です)
★印はエディックスでお取り扱いしておりますから、ご注文の際は直接どうぞ。

□「新しい思想　感性論哲学の世界」芳村思風著　思風庵哲学研究所刊　2500 円
□「感性の時代　東洋の逆襲」芳村思風著　思風庵哲学研究所刊　2000 円
□★「この哲学から日本の復活が始まる　上巻」・下巻
　鈴木繁伸×芳村思風共著　マネジメントブレーン刊　各 1500 円
□「人間観の革正」芳村思風著　致知出版社　2500 円
□「２１世紀　日本の使命」芳村思風著　致知出版社　1200 円

■タイトル名・・・・「21 世紀・日本、夢づくり・国づくり」
■発行・・・・・・・・2003 年 7 月 21 日　初版発行
■講演・執筆・・・・・芳村思風
■編集・協力・・・・・山本英夫
■発行者・・・・・・・株式会社エディックス　出版事業部
〒435-003　4　静岡県浜松市安松町 89-9
TEL 053-465-2116　FAX　053-465-2117
URL　http://www.edics.co.jp
E-mail　edics@edics.co.jp